
銀の輪

翠歌

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の輪

【Nコード】

N7933A

【作者名】

翠歌

【あらすじ】

恋に臆病な奈緒と、優也。可愛くて純粋な恋に訪れる、悲しい別れ。そして成長、旅立ち。『君に出会えてよかった。』そんな恋の始まりと終わりを描く、リアル青春ラブストーリー！。

ブローグ

たった一人の人間に、心を動かされ、悲しくなり、嬉しくなり、愛しくもなる。

そして、憎しみの心も生まれる

愛というものは、本当に恐ろしいものだ。と、私は思う。

そして、どうしようもなくそんな恐ろしいものに惹かれてしまうのは、私が学習能力のない

ただの人間だからなのだろうか。それとも、また違う理由なのか・

・

いずれにしろ、人の恋を悟れるほど大きな人間でもない私に理解できるはずもなく

ただ、ひたすら、人を想うだけ。

プロローグ（後書き）

等身大で書きました。

奈緒の気持ちの変化や、巻き起こる様々な人間模様をリアルに表現できたらいいなと思います。

最後は涙なくしては読めなくする予定なので楽しみに…

第二話

再会

「え？優也？？一緒のそこだったんだあ」
「おう。偶然だな」

席にかばんを置きながら隣の席の男子に話しかける。

入学式も終わり、クラス替えも終わった。クラスの皆は思い思いに隣の席の子と話したりメルアド交換をしたりしている。
まさか、同じ高校だとは思ってなかったものだから、すっかり懐かしい気分。
話に花を咲かせていた。

優也は兄同士が友達で、小学校の頃は親しかった。
一緒に遊んだりしていたけど、中学に入ってから兄から話を聞いたりする程度で

交流はあまりない。

「お前、全然変わってないな」

「言っとくけど、あんたもそんなに変わってないよ」

「嘘つけよ」こんなにカッコよくなったのか？」

そういつて急に席から立ち上がった。

すると、びっくりするくらい身長が高くなっている。

私も負けじと立ち上がると、自分が随分小さくなったかのように思える。

「え？ナシヨ縮んだ？」

「縮んでないよ！！あんたが異常にデカくなっただけ！

っていうか、まだナシヨって覚えてたの？」

「うん。」

遊んでいた頃は私の漢字「奈緒」というのを読み間違えて「ナシヨ」と呼んでいた。

「まあ、別にいいんだけどさ。」

「でも、あの頃よりは女っぽくなっただじゃないの？」

そんなことを突然いわれると、やっぱり緊張というか慣れてないものだから

ドキドキしてしまうのは仕方ない。

「なにらしくないこと言ってるの。」

「いやいや。だって、あのころは俺、ずっとお前のこと男友達だと思ってたから。」

まあ、その頃よりは成長したんじゃないかなって。」

ああ・・・なるほどね。

だからあんなに親しかったのか。確かに小学生で男女一緒に遊ぶってのは

結構恥ずかしいものもあったりするはずだもんな。

「・・・・・・・・」

「なに・・・怒った？」

不安げな表情を浮かべて私の顔を覗き込んでいる。
その顔がまぬけと呼ぶ以外なんでもないような顔で笑ってしまった。
でも、男友達といわれて悲しくないってことはない。
納得はしたけど非常に複雑な思いでいっぱいだ。

「でも、ホントに身長大きくなったね。なんかあったの？」
「別に。なーんもなかった。」

何もなかったと聞いて少し嬉しかったのは、きっと私が負けていない
と思ったから。
そうだ。きっと。

「あ。メアド教えてよ。せっかく同じクラスになったんだし。」
「いいよ。あ。ナシヨも教えるよ」
「分かった。えっと……」

椅子を横に向けて、携帯に優也と登録をした

「じゃあ、気が向いたらメールするね。」

「朝方とか、夜中はやめてくれよ!!」

「分かってますから。」

新しい先生の話聞いて、配布物を配ってもらい、あっという間に高校最初の日は終わった。

同じ中学だった友達とはクラスがだいぶ離れた上に、先に帰ったという。

一人寂しく帰ることにするか・・・薄情者めが・・・

初めて通るような道、一人で帰るには心細いけど仕方がない。門を出て朝きた道を思い出しながら歩いていると後ろから声が聞こえた。

「ナシヨ」

振り返ってみるとそこには優也がいて、一人？と聞いてきた。

「うん。友達先に帰っちゃってさ」

「お前の家、変わってないよな」

「え？うん」

「帰ろうか」

一言、優也が呟いた言葉が信じられなくて、もう一度聞き直した。
明らかにその言葉は、私と帰ろうと言っている。
まさか、そんなお誘いが来るとは思っても見なくて内心バクバク・
・
あの小心者だった優也がこんなに積極的になったのだと、関心すら
感じる。

「え・・・でも・・・2人？」

「何いまさら緊張してんだよ。」

「誤解とかされたら嫌なんだけど」

「じゃあ1人で帰れ」

「いや・・・帰る」

下を向いた。私照れまくりだ・・・

仕方なく、というか正直な気持ち嬉しくて仕方ないという気持ちで、
優也のあとを付いていった。

どうしよう・・・何話していいのか分からない。

沈黙が流れる

「ナシヨはさ・・・」

「何」

「中学の時って、彼氏とかいた？」

「ああ・・・いなかった・・・ような気がする」

「何それ」

「あんたはどうだったのさ」

「俺？俺は・・・何もなかったさあ。片思いはしてたけど」

「へえ」

片思い・・・誰にしていたんだろう・・・少しショックだ・・・
話を変えよう。そうだ。

「あ、慶太さんは元気？」

「兄貴？元気だよ。」

「章一君は？いくつになったんだっけ」

「14。あっという間に中2になりましたわ」

「そうか・・・はやいね。あの頃はまだちっちゃかったのに」

「うん。お前のところは？」

「兄ちゃんも、亮も元気にしてるよ。」

他愛もない昔話や家族の話に夢中になり、あっという間に時間が過ぎた。

気が付けば、家の前についていた

「まだ覚えてたんだ。あたしの家」

「記憶力はいいいから」

「じゃあ、バイバイ」

「おう。また明日な」

そういつて優也は私に背中を向けて歩き出した。
その背中に少し笑いかけ、家に入った。

この日から、私と優也は一緒に帰るようになって

周りの人にはカップルだと勘違いされていた。

席も隣でよく喋るし、帰りにコンビに寄ってアイス買って公園で食べながら帰ったり。

でも、私と優也はそんな関係じゃなくて・・・だからといって私は優也のことが好きじゃない

訳でもないし、中途半端な関係といってしまうえばそれまでのなし。

「今日も前市と帰るの？」

理沙がニヤニヤしながら話しかけてきた。

理沙とは中学から仲がよくて入学式の日先に帰ったのはこいつだ。

「どうだろう。多分。」

「奈緒も女になっちゃって」

「事の発端はあんただつつーの」

「え？あたし？」

きょとんと私を見つめている。頭には疑問符が並んでいるようだ。

「そういえば、彼氏できたんでしょ。」

「ああ。まあね。3組の後藤くん」

「入学してまだ1ヶ月も経ってないのに・・・」

「奈緒に言われたくないさ」

「だから、あたしと優也は付き合っていないって・・・」

疑り深い目で私をみてる。付き合っていない・・・確かにそうだ。だってあたしと優也はただの友達だもん。

きつと、あっちだってあたしのことをただの友達って思っているはずだし。

「付き合っていないか・・・ちょっと期待してたのにな。」

「何に」

「奈緒は彼氏が出来たらどんな風になるのか」

「出来たとしても変わらないから。」

「そうかな？そんな事いつて、実際はすごい変わったりして」

「変な想像はやめてください」

昼休みはあつという間に終わり、帰りのHRもあつという間に終わった。

帰りのHRとか、まず聞く気がなくて寝てたからやけに早く感じただけかもしれないけど

「さつき、よだれ垂らして寝てたぞ」ナシヨ

「ウソ！」

「ウソです。」

帰り際に先生に呼び止められ、そこで掃除を頼まれた・・・ってい

うか、命令されて
現在掃除しながら会話している。

「お前HRずっと寝てたんだから罰として掃除しろ」

あの先生はきつと鬼です。そう確信した。

優也もとばっちりを受けて、となりで拭き掃除をひたすら地道にしている。

その姿がなんだかわいらしくて笑ったら優也は笑うなって言った。

「なんか夕日赤いね」

「あ、知ってる？夕日がかなり赤いって言うかオレンジの時ってその日か近いうちに地震が起こるんだってよ」

「ウソ」

「マジだって！！じゃあ、ホントに今日地震おきたら100円な」

「なんであたしがあんななんか100円もあげなきゃなんないのさ」

「信じなかった罰」

「ええ」

「じゃあいい。」

ふてくされたように優也は後ろを向いてせかせかと掃除を始めた。
分かり易い怒り方だな・・・全然変わってないじゃん。

「仕方ないなあ」

「え！？くれんの？」

「本当に起こったらね」

「よっしゃあー!」

「100円ごときでそんなに喜ぶって・・・あんた相当金欠でしょ」
「.....」

とぼけたふりをして視線を宙に浮かばせている。

それに笑ってしまった。そういえば、小さい頃もこんな風にいつも笑わしてくれたっけな。

掃除も終わって職員室によった

「よし。よく頑張ったな。帰ってよし」

確認もせずに先生は笑っていった。なんかご褒美とかないんかい!!
そう思いながらとぼとぼと二人でいつものように帰った。

「暗くなってきたね」
「うん」

さっきまでの明るい雰囲気は消えて、なんだか寂しい雰囲気に包まれていった。

二人とも下を向いて私は優也から少し遅れながら歩いた。

ガガガ・・・ッ
突然地面が揺れた。地震にあったことのなかった私はとりあえずしゃがみ込んだ。

「ヤツ・・・」

「ナシヨ！！」

優也がそばに駆け寄ってきた。

「大丈夫か！？」

「うん・・・」

地震もいつのまにかおさまり辺りには妙な静けさが広がった。

ハッと気付くと、優也の手が私の肩を包んだ。

気付かなかったのは、優也の手は安心感があつたから。なんの違和感もなかった。

「あ・・・ごめん」

「いや・・・いい。ありがとう」

「立てる？」

「うん」

立ち上がった。正直、優也の顔がまともに見れない。恥ずかしくて

優也も必死で目をそらせているように見えた。

私と優也は似てる。恥ずかしがり屋なところとか、けど、優也はあのころとは

比べようもないくらいに男らしくなっていた。

私は財布を取り出してこっそり１０５円を取り出して

優也の制服のポケットに入れた。

優也は少し驚いたような顔をして、ポケットの中の物をすべて出した家の鍵、ガムの包み紙、糸くず、ロッカーの鍵と、それについている

Donaldのキーホルダー。それに混じって入っていたのは105円。優也はいたずらっこのようににこっと笑った。私もつられて笑った。

「なんで105円なわけ？」

「助けてくれたお礼」

「・・・ふーん」

照れ笑いのような笑みを浮かべて、二人で歩いた。

5限目教科は理科。ただひたすら眠たさに打ち勝とうと戦っている時間だ。

隣をふと見た。優也はあっさり眠気に負けて熟睡中だった。

うとうとする。でも私が寝たときに限って先生に注意されるんだよね・・・

シャーペンで刺したあとが手に赤く残っている。

ダメだ・・・もう限界。

優也を見ながら少し幸せな気分で目を閉じた。途中、先生の声が聞こえたけど

もう遅かった。意識なんてもうすでに夢のなかに引きずり込まれていたから。

目を開けると、優也が目の前にいた

「なにしてんの」

私は静かに言った。寝起きは昔から悪かった。優也はもろにびっくりしたようで
後ろに倒れかけていた。

「いや・・・違うから！！ナシヨ起こそうと思って・・・」

「・・・今何時？」

「6時7分」

「うそ！！もうそんな時間！？」

「皆帰った」

「何で起こしてくれなかったの？」

「起こしたらなんか悪いかなって思って・・・」

はぁ・・・呆れる。で、今の今までずっと私が起きるの待ってたわけ。

「早く起こしてくれてよかったのに・・・」

「でも・・・なんか悪いし」

窓の外をふと見た。時計はすでに6時を回っていて
空は茜色を過ぎて紫色をもうすぐ越そうとしている。

「あーあ。もうこんなに暗くなっちゃったよ」

「俺が居るだろ？」

「女の子1人、起こせないような男には頼りませんから」

優也はすこし膨れて教室のドアへと向かっていった。

私はカバンに教科書やなんやらを詰め込んで優也の後を急いで追いかけた。

「うっわ。寒」

「こりゃあ寒いな」

外はすっかり冬の気候になっている。

昼は暑そうだったからブレザー着て来てないし、こんなに気温って急に変わるもんなんだ。

「もうやだ」

「ナシヨ、ブレザー着てないし。アホだ」

「うるさい。暑い嫌いだから着て来てないんだよ」

「明らかに今日は暑くなかったよね」

「もー・・・過去を悔やんだって仕方ないし。」

「ほら。」

優也は私に自分の着ていたブレザーを渡した。

「なにちよつとカッコいい事してんの」

「うるせー。着ないなら俺が着るぞ」

「凍死させる気!？」

「何言ってんだ」

ブレザーを後ろから掛けられて、私は黙って袖を通した

「あゝ。あつたかい」

私が振り向くと、バツと勢いよく目をそらした。きっと、ものすこい恥ずかしがつてるんだろぅな」

そう思うと、なんだか自分まで恥ずかしくなつて下を向いた。

「あ・・・明日からは本格的に冬に突入だつてさ」

「ふゝん」

「寒くなるよな」

「そうだね」

冷たい風は二人の頬を撫でていつて赤く静かに染めていく

二人にいつもみたいな笑顔はない。

優也の気持ちは分からないけど、少なくとも私は、いつもと違う気持ちを感じていた。

ただ二人、黙ったまま歩いてる。その距離は近くて、肩が触れ合う寸前。

いつもはこんなにドキドキしないのに、何故だか今日はいつもと優也の表情が違つて

顔を直視することなんて出来ない

白い息とも

消えてしまえや

恋心

暖かな

君の隣に
いる証明
この肩の
温もりに
重ねて

ふと、本で読んだ短歌や俳句を思い出した。
状況にあまりに当てはまりすぎているから。

「とても寒い、何も喋らぬ、君の横」

優也は突然喋りだした私に対して目を大きく開いて驚いている。

「何それ」

「短歌」

「そんなの興味あつたっけ」

「ううん。ただ、言ってみただけ」

「なんだっけ」

「・・・とても寒い、何も喋らぬ、君の横」

「・・・」

優也は黙って下を向いた

「それって、今の状況のこと？」

「さあ、どうでしょうね」

立ち止まり、さっき借りた優也のブレザーに顔をうずめて目を閉じた。

優也に、少し構って欲しかったから。

「もうだいぶ暗いぞ」

「怖くない」

「もっと寒くなるぞ」

「ブレザーがあるから平気」

「誰かに襲われるかも」

少し目を開けて、しゃがんだ。

「優也がいるから、別に大丈夫」

優也を困らせたわけじゃない。けど、ずっと黙って家に帰るのは長い道を歩いているような気がして、

なにか、私の中で空白が生まれそうになったから。

優也はただ私を見つめている。

「帰ろ」

優也は私の手を握って立たせた
手を握られていることが私にとっては大きなことでびっくりして
口を開けっ放しにしている

「何お前情けねー顔してんの」

「誰のせい・・・」

「うるせー、俺もだいぶ恥ずかしいんだから黙ってる!」

こんな積極的なことしながら、何恥ずかしがってたんだ。こっちまで恥ずかしくなるじゃん・・・

「優也、手あつたかいね」

「お前は冷たいね」

「心が暖かいから」

「あーそうですか」

「そうですよ」

さつきよりも、口数が増えて嬉しくなった。

優也の手が暖かくて、さつきまで凍えそうだった私の心も優しくあつた。

「俺の手まで冷たくなりそうなんですけど」

「仕方ないじゃん体質なんだから」

「俺の体温がナシヨに吸い取られていく・・・」

「なにバカなこと言ってるのさ」

何気に優也の手を握り返してみると

優也も私の手を握り返してくれた。寂しかったさっきまでの気持ち
は薄れていって

もう、温かい気持ち私が私の中を渦巻いていた

第三話

屋上

季節は冬を迎えようとしている。

いや、もうすっかり迎えてとどまっている最中だ。

「優也どこ行っただか知らない？」

斜め前の席の青木に話しかけた。優也と仲がいいらしい。

「まえっちだったら屋上じゃね」

「ああ。ありがとう」

優也に借りたブレザーを返そうと思って持ってきたのはいいけど
肝心の優也がいなければ返そうにも返せない。

屋上か・・・行ったことないな、場所は知っているけど。だってな
んか不良がいっぱいいるから怖いし。

優也、屋上になんか行ったりするんだ。めずらしい。

あのバカでも黄昏れたくなるんだね・・・

取りあえず屋上へ行ってみることにした。階段からして怖いし。な
んか無法地帯っぽいイメージがあるし。

屋上へと繋がる階段にはタバコのごみやらがちらちらと見える。

ドアをあけた。空が近く感じる。

「優也」

周りを見渡しながら名前を呼んだ。

そのとき、ダンツと何かが落ちる音がした。

「ひっ」

「そんなビビんなくていいから」

そこには茶髪で芸能人つてくらいにキレイな顔の男の子がいて、私を笑いながら見ている。

つて言うか・・・誰ですか・・・みたいな。関西弁風の言葉が耳によく残る。

「誰・・・」

「ダイキ」

「あ・・・そうっすか・・・」

そういうと、ダイキなる人は私を指差した。人に指差したらいかんって小学校で習わなかったか!?

「あんたは？」

「滝村・・・ですけど」

「違うつて、下の名前!!」

「ああ・・・奈緒です」

「ナオね。分かった!!」

いやいやいや・・・早速下で呼び捨てですかい・・・

「あ。前市優也、知りませんか？」

「まえいち？・・・ああ、前っちか！しらんなあ。ここには来てへんよ？」

知り合いだったのか・・・優也の交友関係って今いちよく分からんな。

「そうですか。じゃあ、帰ります」

踵を返して帰ろうとすると、後ろから声が聞こえた。

「ナオ！！」

「なんでしよう・・・」

多分、すごい今怪訝な顔してると思う。さっき会ったばかりの男に呼び捨てされたから。

「仲ようしてな」

「え？はい・・・」

するとダイキはにっこり笑って手をひらひらさせた。

転校生だったのか？突っ込みどころ満載だったけど。

まあ、この学校結構大きいし、今まで見たことない人だっていっぱいいるし、どうせ、その中の一人でしようしね。

たいして気にもせず、屋上を後にした。

教室に帰ってみると、そこには座って青木と喋る優也がいた。

「あんたどこ行ってたの！？」

「図書室だけど。」

「なんでまた・・・」

「いや、図書委員だから俺」

そういえばそうだったような。青木君は申し訳なさそうに私を見た。

「ダイキって、知ってる？あの・・・屋上にいる」

「え？なんで大喜のこと知ってんの？」

ダイキと名前を出した瞬間、優也の顔が怪訝そうに曇った。
嫌いなのか？

「さっき屋上に行ってみたらいたの」

「ダイキが？」

「うん」

「なんかされなかったか？」

「大丈夫だけど」

「ならいいや。ダイキには、あんまり近寄んなよ」

何がいいんだか・・・近寄るなって何で？

ダイキって、一体何者なんだ・・・謎だ。ちよつと気になってたり

する

「理沙く、Do you know DAIKI?」

理沙は一瞬ぽかんって顔をして驚いたように私の机に身を乗り出してきた。

「ダイキ！？北見大喜でしょ！！」

「北見かどうかは知らないけど」

「なんであんたいきなり北見の話しすんの！！？」

「いけなかった？」

「あんだ、本当に北見大喜のこと知らないの？」

「うん。」

「はぁー・・・呆れる・・・」

理沙は私に向かって盛大なるため息をついた。

「この学校入るなら北見を知つとかないと！！」

「そんなに有名な人なの？」

「有名も何も・・・あれは超危険人物だつて！！」

「そんな風には見えなかったけどな」

「もしかしたらもう目付けられてるかもよ！！」

「目？」

理沙は大きく息を吸い込んで喋りだした。付いていくのも苦勞するくらいに早口で

正直、なんていつていたかよく分からないし

「北見大喜。3年生、ダブっていて年齢不詳。ハリウッドスター並みの超美形。

そのルックスに加え、家柄も社長の息子で超金持ち。寄ってくる女は数知れず新宿を制覇した噂もあり。

裏まで顔が回るみたいでどこまで手を出しているかもさっぱり。

ある噂では、目が合ったらボコられるらしいよ。

学校側は資金提供の約束で北見を置いているらしいんだけど3年間結構の年月ダブってるらしいよ。あと、本当かどうか知らないんだ

けど、一番怖い噂が………」

「何？」

理沙は声を潜めた。

「人、殺したんだって」

シンと静まり返った。

あのダイキって人が人を殺した？信じられない。

って言うか、デマでしょ。

あんな明るそうな人が人なんて殺したわけないよ。

「へえ」

「本人に会った人なんて珍しいよ」

「一流芸能人みたいだね」

「ウチの学校内では一流芸能人よりすごい有名」

「いや、貴重な体験したわ」

「なんであなたはそう楽天的かな。・・・これからは氣をつけたほうがいいよ」

目付けられたんなら取り返しつかなくなるだろうから。」

「大丈夫。あたしみたいな一般庶民は相手にしないって。」

理沙は疑り深い目で私を見た後、まあ、別にそれならいいんだけどね、といって

売店に行った。ジュースを買いに行ったらしい。あたしはめんどくさいから行くのをパスした。

正直、理沙の言っていることの70パーセントは信用してない。

だって、所詮高校生だし、新宿とかってありえないでしょ。これからの学校生活に別に

支障を起こすわけでもないなら、関係ない顔をしておくのが一番。

でも、仲ようしてなって言ってたよな。それってどういう意味だったんだろうか・・・

「ナシヨ！ごめん。今日は一緒に帰れない」

「何で？」

「委員の仕事入っちゃって、これ、結構遅くなりそうだからさき帰つていて」

「・・・分かった」

外は茜色。しばらく教室に残ることにした。別に残る理由なんてないけど、

窓際の前から4番目の席に座って、運動場を眺めていた。

あ、理沙だ。あれが後藤君か。そんなにタイプじゃないな。まあ人それぞれだし

茜色の夕日も沈みかけ、そろそろ寂しくなった。

帰ろう。カバンをもって教室からでた。

校門前に来た時、ものすごく遠くのほうから名前を呼ばれているのに気が付いた。

かすかに聞こえる声。振り返ってみると、屋上から声が聞こえる。

「ナオーー！！ちょっと、そこで、待ってるー」

「ダイキ！？」

自分の声の大きさに気が付き、下を向いた。幸い、誰も気が付いていないようでホッと胸をなでおろした。

数分後、ダイキらしき人物が、私の前に歩いてきた。

「ナオ！久しぶりやなあ！！」

「いや、今日会いましたから。」

「一緒に帰ろうかあ」

「は！？」

「俺も一人やねん。どうせやから、一緒に帰ろうや」
「別にいいですけども・・・」

ダイキと一緒にいるって噂が流れるのも嫌だからなるべく、人の視線を避けるように歩いた。

「なあ、ナオって俺のことしらの？」

「今日聞きました。友達に」

「ああ、聞いてもうたんか」

おどけた顔でダイキはいった。
人を殺したって話は黙っておこう。どうせデマなんだから。

「なんて聞いた？」

「社長の息子で大金持ちとか、新宿を制覇したとか・・・」

怒る？そう思っすこし身構えた時
ダイキは少しほっとしたような顔をした。

「引いた？」

「いいえ。そんな人もいるんだなあ」と

「良かったわゝナオに誤解されたらどうしようって思った」

やっぱり、こんな楽天そうな人が人を殺すなんてありえないよ。多分。

「ナオは彼氏とかあるん？」

「何聞くんですかいきなり!!」

「おるん？」

「いませんよ」

「へえゝ」

ダイキは意味ありげに笑みを浮かべて道端の石をけった。

「あ、そういえば今日屋上で（仲良くして）って言いませんでしたっけ？」

「言ったっけ？」

「あれ？違ったかな・・・」

「まあ、仲良くして欲しいんはそうやけどな」

「何で？」

ダイキはあたしの目をじっと見てへらっと笑った。

「なんとなくや」

「なんとなく・・・」

照れ隠しで言っているのか、はたまたあたしをからかおうとしているのか

ダイキはよく分からない。でも、なんだか放っておけないような気がしてしまう。

「何て呼んだらいいですか？」

「ん？」

「名前」

「ダイキでええで」

「じゃあ、ダイキで」

そういつて、お互いの名前を呼び合い確認した。

「これからも、あの屋上行ってもいいですか？」

「ええよ別に。」

「この前いったとき気に入っちゃって」

「いつでもおいで。」

ダイキとあつてから、少しずつ変わりだしたのかもしれない。
運命って言うのが、変わってる。なんか、自分でも分かる。

これから優也と私の何かが、どんどん変わっていく。そんな気がする

第四話

存在

「転校生くるらしいよ。」

「マジで？」

学校中その話題に溢れていた。

皆朝からタフだなあと思いつつ、教室に入る。

誰が一体こんな情報を手に入れたんだ。しかも朝っぱらから……

「奈緒、おはよ」

「おはよう」

「転校生くるらしいね」

机にカバンを放り投げながら理沙のほうを向く

「ああ。学校中に充満してるよね」

「聞いたんだ」

「聞こうとしてないのに入ってきたの」

理沙に一瞬背中を向けてカバンを机に掛けた。

「相当な美少女らしいよ。名前はナツコちゃんだって」

「へえ」

「反応薄」

「男子じゃないし、あたしノーマルだから女の子に興味はない！」

「学校中の男子がナツコちゃんに夢中になったらどうすんの」
「いいじゃん別に」

「あんたね、学校中の男子の中に入ってるんだよ前市は」
「そうだね」

「なんでそんなに反応薄いかな」

だって、別に優也とそのナツコちゃんって子が関係あるとかそういう可能性は少ないだろうし

大体、あたしと優也はそんな関係じゃないんだからあたしが心配する問題じゃない。

それに優也はそこまで血気盛んなわけでもないし
転校生に大喜びしているところは想像できない。

・・・って言うのは気休めだろうか

「1年生でしょ」

「うん」

「いいね、年下」

「取られたらどうするの!？」

「取られるも何も付き合ってないっつーの」

H R明けの休み時間、教室はパラパラと少人数の生徒しかいない。
噂の転校生ナツコちゃんを見ようとほぼ生徒の全員が1年生の棟（略して1年棟）に行ったからだ。

理沙は少し気になっているようで1年棟を窓から見ている

「見えないでしょ？」

「うん」

「見に行ってくれば」

「いいや」

教室のドアが開いた。

そこから見たのは茶髪ですごくキレイで可愛い女の子

私と理沙、その他の教室に残っていた全ての生徒はドアを向いたまま
フリーズしていた。

「あの・・・優也いますか？」

優也？優也？え？今、ゆうやって言った？ウチのクラスには優也は
ただ一人・・・前市優也のみ。
この子優也の知り合い？

嫌な予感が私の中の的に的中する音が聞こえた。・・・気がする。

「あの・・・お名前は？」

恐る恐る聞いた。

「駒井夏子です」

「ナツコちゃん!？」

「あ・・・え？はい」

私と理沙は顔を合わせて呆然とした
ナツコちゃん・・・噂のナツコちゃん・・・こんなに早く会える
とは思っていなかったよ。

ナツコちゃんは、突然見ず知らずの先輩にナツコちゃんと呼ばれたから驚いた顔をしている
うわー可愛い・・・苗字まで可愛いもんね。コマイって

「優也は今いないよ」

「あ・・・そうですか」

「何か急用？」

「いいえ、ただ来ただけです」

来ただけ・・・大胆だなこの子

出て行ったナツコちゃんを目で追いながら、嵐の後のように静まり返った教室に
少し笑った

本当は心の中がカナリ大荒れしているのに気付いてる。
逃げ出したい。叫びたい。

「屋上、行ってくるね」

「え！？なんでそんないきなり」

「いや、なんとなく。外にでたいから」

「あ、そう。じゃあ待ってるから」

「はあい」

屋上へと向かった。正直逃げ場を求めてた。一人になれる場所
って言っても、きつとダイキはいるけどそれでも、教室にいるよりはマシだと思ったから

キィと音を立ててドアが開いた。

目に付いたのはダイキと女が強烈なラブシーンを繰り広げていた状況のみ。

空の青さなんて気にする余裕すらなかった。っていうかそれどころじゃなかった。

せっかく開けたドアを焦って閉めた。心臓がバクバクいつている。目がこれ以上開かないって位開いてるのが分かる。落ち着こうとしゃがんだ時、後ろのドアが開いて、さっきの女が出てきて

「・・・・・・・・」

無言で立ち去っていった。正直ボコられるかと思っていたけど、そんなに悪い人じゃなかったみたいだ。

何か、中に入りづらいし・・・教室戻ろう。

踵を返して階段を下りようとした時ドアが勢いよく開いてダイキがでてきた。

「ああ・・・・・・・・ど、どうも」

不自然極まりないな。我ながら下手な交わしで・・・・・・・・

「見た？」

「・・・・・・・・うん」

直球から聞いてくるなよ。こんなの慣れてないって。

「ビックリした？」

「うん」

ダイキはいきなり笑い出した。

「いまだき珍しいなあお前。さっきのただキスしとっただけやで？」

ただキスしてただけ？ただ！？

やっぱりダイキは新宿制覇しただけあるな。

「さすが新宿の帝王」

「はあ？」

ダイキはこれでもかというくらいに笑い転げた。

「ダイキ・・・」

「ん？何？」

呼びなれてないからなんかいいづらいな・・・

「ナツコちゃんって知ってる？」

「ナツコちゃん？ああ、駒井夏子か」

「知ってるんだ」

「そりゃあ、一応この学校の生徒ですから」

「情報入ってくるんですね。こんな所にいても」

「なあ。その敬語やめん？」

急に話が変わってダイキは露骨に嫌な顔をして

私に言ってくる

「え・・・でも一応先輩だし」

「一応が付くくらいならええやろ。ほら。友達やねんからもつとフレンドリーにならな」

「じゃあ・・・そうする」

よし。と納得しながらダイキはポケットからタバコの箱らしきものを取り出した。

「え！吸うの？」

「うん」

「ダメだって。体に悪いから」

「ええやろ、別に。誰も俺が体悪くなっただって気が付かんし」

「でも・・・」

ダイキはお構いなしにタバコを吸いだした。

煙が私を取り巻いて上へのぼっていく・・・私の気持ちも、煙と一緒に昇って言ったらいいのに。

ダイキは私の浮かない表情をみて気が付いたのか、頭を撫でてきた。

なんだか、慣れていない手つきなのに優しさがひしひしと伝わってくる。

ダイキをみると、こつちをみて、父親のように笑っている。

私も少し笑ってしまった。

ダイキはきつと誤解されやすいのかな。無口だし、黙っていたら不機嫌そうだし近寄りがたいし
けど、本当は誰よりも優しい・・・と思う。たったの3日しか話したことないけど

笑わせてくれる。悲しい気持ちを消してくれる。

なんだか、ダイキといれば安心する。好きとか、そんな感覚じゃなくて、

家族みたいな、そんな感じ。

「ダイキ」

「何？」

「……ありがとう」

ダイキは大人っぽい笑顔を見せてまた頭をくしゃくしゃと撫でた。

「何があつた？」

「……ナツコちゃんって子のこと」

「転校生？」

「うん」

「が、どうした？」

「すごい、可愛いよね」

「みたいやなあ」

「可愛いし、キレイだし……あたしなんかすごい凡人で、可愛くなくて……」

「……彼氏取られたんか？」

「取られてないし。大体、彼氏なんていないもん」

「好きな人？」

「……別に、好きってわけじゃないよ」

「ナオは素直じゃないなあ……」

ダイキは空を仰いでさっきまで口にくわえていたタバコを地面にこ

すり付けて火を消した。

「本当だもん」

「そんなんやったら、ホンマに転校生に取られてまうで」

少し胸が苦しくなった。

って言うか、鼓動がおかしくなったって言ったほうが正しいのかもしれない。

「なんか、その事実から逃げ出さなくなっってここに来たんだ。けど、実際は逃げ場なんてどこにも存在しなくて……。どうしたらいいのか分からない」

ダイキは首を鳴らし私を見た。

「逃げようとするから、余計に苦しくなると違うか」

「逃げなかった方が辛いよ」

「本人に聞いたんか？」

「本人？」

優也には聞いてない。ナツコちゃんにも聞いたことはない。

「大体、その逃げたい事実が証明されたわけでもないのに信じ込むのも」

どうかと思うけどなあ」

確かにそうだけど・・・

「本人に・・・聞くの？」

「うん」

気が引けるなあ・・・大体彼女でもないのに「あのことはどう言う関係？」

なんて聞けないし・・・

「まあ、ナオのしたい様にしたらええがな。俺がわざわざ首突っ込む問題とちゃうしな。」

「え・・・ダイキ冷たー・・・」

ダイキは私の肩を軽く叩いて授業に行けと催促した。正直行きたくなかったけど（優也の隣の席だから）仕方なく屋上から出ることにした。

チャイムの音は今の私とは正反対に明るく次の踏ん切りをつけるかのように

鳴った。

優也のことで気を取られて授業どころじゃない・・・
どうしよう。やっぱり、聞いたほうがいいのかな・・・

「頭いてえ」

優也が隣で顔を伏せながら呟いた。

「・・・先生・・・」

「どうした。」

「頭痛いんで、ちょっと保健室に行ってきます」

「一人で大丈夫か？」

「・・・無理っぽいです」

「じゃあ・・・滝村。付いて行ってやれ」

「はあ？あたしが？」

見事にタイミング悪く私を指摘してきた。

先生は少し呆れた顔をして、紙に「保健室行き 前市 頭痛」と書いて、私に渡した。

私は優也のふらつく足元を支え、よろけながら教室を出た。

それにしても、こんなアホでも力ぜって引くんだね・・・。
カナリ辛そう・・・。

「・・・」

「・・・」

喋るのも辛そうだし、気まずかったから何も喋らずに歩いた。

「え・・・嘘」

私が声をだすのも無理はない。保健室の鍵は開いているのに最大に重要な先生がいないのだから。

「何？先生は・・・」

優也の喋る言葉もだんだん早くなる息にかき消されていくとりあえず、ベッドに寝かそう。

そう思つて、奥のベッドへ優也を連れて行つた。少し重かつたけど優也を寝かせた。

「先生いないっぽい」

「そつか・・・」

「苦しいでしょ。喋れないほうがいいって」

優也は目も開けずに苦しそうに呼吸をする。

私はたまらなくなり、優也の頭を撫でた。

大した効果がでないことくらい分かるけど、何かしてやらないとって思ったから

少しずつ、優也は落ち着きを取り戻したようで気持ちよさそうに眠ろうとしている

絶えずに頭を撫でる。

「ナシヨ・・・」

「ん？何」

「ありがとう・・・」

「いいよ。もう、寝な。」

「・・・」

静かに、眠りに付いた。

寝顔は、やっぱりいくつになっても変わらないもんなんだ。昔とま

るで変わってない。

保健室から、音を立てないように静かに出た。
教室にはゆっくり、ゆっくり向かう。

先生には悪いけど、今は授業どころじゃないんだ。

鼓動が高鳴って、どうしようもないから。

鼓動を抑えつつ廊下を歩く。

私は、やっぱり、優也のことが好きなのかな
たかが寝顔でこんなに心臓が爆発しそうになったことなんて1度も
ない。

なんなんだろう。どうしたいんだろう・・・あたし・・・
もう。訳分かんない。

教室に戻った。とりあえず落ち着いて
真剣に授業に耳を傾けた・・・けど、正直、授業なんてどうでもよ
かったけど

気をまぎらわせるためには好都合だったから。

放課後。ガヤガヤと皆が帰っていく。それぞれ部活に行ったり友達と喋りながら帰ったりしてにぎやかだ。

優也の様子を見に行ってみよう。まだ寝てたら起こして一緒に帰ろうかな。

そのときにナツコちゃんのこと聞いたらいいんだよ。

保健室なんかによらなければ良かったと、今ひしひしと実感している。

寄りさえしなければ、こんなに後悔する事だっけなかったのに。

「優也、もう大丈夫？」

「あ、うん。心配してくれたんだ。」

「当たり前じゃん。優也が保健室で寝てるからびっくりしちゃった」

「今日はちよつとヤバかった」

「もう大丈夫なの？」

「うん。心配させて悪いな」

「いいよ。優也が大丈夫なら」

「優しいな。お前は」

「優也に言われるとうれしい」

優也、風邪治ったんだ。

優也はいつもの笑顔で無邪気に笑ってナツコちゃんの頬に触れた。

第五話

秋空

ダイキは相変わらずタバコを口にくわえている。姿は見えないけど、煙が上へと昇っていつている

空はもう、茜色に染まり、風もすっかり冷たい。

今、何が起こっていたんだろう。

保健室には、優也とナツコちゃんがいて、楽しそうに笑って、頬を触ってた。

何が起こきたなんて、本当は全部理解できた。ただ、理解できたことを認めるのが怖かった。

「ナオ？」

不思議そうに私を見てくる。私と、ダイキの距離は近い。

「空、きれいだなあって思って。上がってきちゃった」

秋の空はただ冷たく、私の心さえも吹き込んでくるからタチが悪い。
秋なんて嫌い。夏と冬の変わり目だから温度差が激しい、風邪だつて引きやすくなる。

切ない気持ちになる。

ダイキは何も喋らない。私も何も喋らない。
沈黙は思ったよりも辛くなかった。

ダイキといると、なんだか、自分がやけに小さく感じる。
身長の関係もあるけど、妙に大人びた表情も私が子供になったような気にさせる。

体操座りをしてじっとしている。
ダイキのタバコの匂いが鼻を掠める。不思議と、この匂いが落ち着く。

優也はもう帰ったかなあ。
ナツコちゃんとはあの後どうなったんだろう。

ふと、ダイキの顔を見ると一点に視線が集中している。
気になってダイキの視線を追った。

何が見えた？ 私には優也とナツコちゃんが2人で歩いている様子が見えたよ。

ダイキは何を見ていたの？

誤解とも

思えぬほどに

仲むつまじく・・・

「青春って感じだね。あの二人」

ダイキに話しかけたのに、聞こえているのだからいんだか何も喋らない。

「ねえ。シカト？」

「・・・」

「ダイキ」

「・・・」

「何で黙ってんの？寂しいじゃん。」

「ナオ・・・」

「一人にしないで」

私の中の空白は、もう一人じゃあ埋めきれないほどに大きく広がっている。

ダイキはタバコを口から離れた。

「意味分かんない・・・もう」

「ナオは、前つちのこと、ホンマは大好きなんやろ」

その言葉に反応するけど知らんふりをする私はどうしようもないほどの意地っ張り。

「違うよ。ただの友達で、あいつが先に彼女作ったから悔しいの。あたし、まだ彼氏いないし。先越されたのが、ムカつくだけ」

ダイキは苦笑いを浮かべてまたタバコをふかす。

私は、自然と体が傾いてダイキにもたれかった。ダイキは驚きもせず
ただ私の体を支えた。

そのまま、二人で、暗くなるまで屋上にいた。部活帰りの子たちが
ワラワラと帰っていったあとに
ダイキに家まで送ってもらった。

家に帰った後、優也からメールが来たけど返信せずに
受信ボックスに放置した。

私はきつと、恋というものをすごく恐れている。

恋とか愛はドラマや漫画や本でしか知らない。実際、自分が小学生のころに優也に抱いていた感情を認めるのが怖かった。

自分がそれだけのことで悲しむとか、それだけのことで怒るとか、すべての感情を恋というものに乗っ取られそうになるような気がする。

だいたい、ドラマとかフィクションのものはハッピーエンドに終わるけど

私はその裏の主人公の感情に気が行ってしまっ、幸せに終わるはずがないと思ひ込んでいた。

着信音が部屋に鳴り響く。

またメール。ディスプレイにはしっかりと「優也」と写っている。

しつこいな。

少しイライラしながら読まずに受信ボックスに放置する。

だけど、優也からのメールでイライラしているわけじゃない

救いようのない意地っ張りな私自身にイライラしているのだ。

もしかしたら、優也とナツコちゃんはただ単にイトコ同士とか、昔から親しかったとか。

けど、いくら親しいったって、あんなに愛しそうに見るか？あんな顔の優也なんて見たことないぞ？

しかも、何あの会話。

「優しいな。お前は」「そんなことないよ」

恋人同士の会話かそうじゃなかったら兄と妹の会話にしか出てこないそう。

ム力つく

確かに、私はム力ついている。

何に対してム力ついている？自分に対しての苛立ち？

それもある。けど、もっとム力ついている。

優也を取られたから……？

ありえない。ありえない。

私はそんな嫉妬を抱くほど優也が好きなはずがない。

そう。

好きなわけが、ない。

だんだん、自分に対してずっと思い込ませていたことが疑問に思えてきた

優也と一緒に帰って、地震があったとき。

優也に肩を抱かれて、嫌だとか、思わなくてただ単に安心した。

この前一緒に帰った時、優也のブレザーを貸してもらって着たとき暖かった。

その後に、私は駄々をこねた。今更だけど、何で私は駄々をこねたんだ？

寂しかったから。

優也にかまって欲しかったから。

優也に手を握ってもらった時、嬉しかった。
素直に、ドキドキしたんだ。

それは、全部、私が優也のことを好きだと証明するには十分、過ぎるくらいの証拠で
今までずっと私はそのことを自分自身に隠そうと思っていた。

優也のことが好きだと気付きなくなかったから。

好きになったら、きっと、今までみたいに楽しく友達同士として笑えない

好きになったら、きっと、優也と今までみたいにじゃれあったり、
食べ物のことでケンカしたり
そういうことが出来ないと思っていたから。

このまま、私が優也を好きだというのは隠し通そう。
いつもどおりに普通にしよう。

好きだというのは気付いた。もうそれだけで十分。

私は、優也とはずっと、友達でいたい。

フラれて、もう友達に戻れないなんてことになったら
私はきっと、壊れてしまうだろう。

この気持ちは、ダイキに明日伝えよう。

ダイキなら、きっと、私の話を聞いてくれる。私の気持ちを理解し
てくれるはずだから。

第六話

初恋

教室に入ると、優也が目にはいった。
青木と数人の男子に囲まれている。

「なあ。前うち！昨日駒井夏子と一緒に帰ったんだって!？」

「ああ。まあね」

「羨ましいなあこの野郎」

「どうせラブラブしながら帰ったんだろ？」

優也はニコニコしながら男子と戯れている。

ねえ。何で否定しないの？

本当にナツコちゃんと、付き合ってるの？

教室に居られなくなって、屋上に逃げ込むようにして出た。

ドアを開けた。今日はなんだか曇り空が広がっていて
無性に寒く感じる。

「ダイキー・・・」

返事はない。

今日は来てないのかな？

ふと、この前、私がダイキと一緒に座っていたあの段のある所へと
足が向いた。

風がよく吹き込む。

何で女子だけスカートなんだろうと学校を少し恨みながらカイロを
強く握り締めた。

「!」

ダイキがそこにはいた。

寝そべりながら空を見上げているようだ。

ボーっと、ただ空を見つめてる。寂しそうな目が、少しはなれたこ
の場所でも分かる。

ダイキって。一体、昔、何があったんだろう。

「ナオ。おいで」

私がいたの、気付いてたんだ。恐る恐るダイキに近づいた。

ダイキは、私の顔を見て口元を少し上げて笑った。
いつものヘラヘラした笑いじゃない。

何か、少し切なさを感じた。

「そろそろ来るやろうなあって思ってた」

「エスパー？」

「そうかも」

言い出そう。ダイキは、何て返すだろう？
やっぱり、バカにする？

「あたしね……」

「何？」

「恋したかもしれない」

あえて、曖昧に淡々と言った。

「気付くの遅いねん」

ダイキは笑った。その笑顔は、やっぱりいつも通りヘラヘラしてた。さっきの寂しそうな顔は、見間違い。きっとそうだ。」

「ずっと、恋するのが怖かった。小さいころから。」

「何で？」

「自分のすること全て、愛とか恋とかに乗っ取られそうだったから」

笑う？

私の予想とは裏腹にダイキは少し考え込むような顔を見せた。

「それに・・・恋したら、友達には戻れないような気がするんだ」
「・・・」

「だって、今までと違う接し方になるだろうし、食べ物のものでケン力とか出来ないし、
今までみたいに笑い合えないと思う」

ダイキは下を向いて黙ったまま私の話を聞いている

「けど、好きってことは、認めようと思って。」

昨日、考えて考え抜いた答えがそれ」

「・・・」

「・・・けどやっぱり、恋なんて、しなきゃよかった」

ダイキの視線を感じた。

「優也とナツコちゃんの話の聞いただけで泣きそうになる・・・」

ダイキは大きくため息をはいた

「あかん。俺には純粹すぎて目がくらんでまう。」

「？」

「俺に近寄ったらあかん。ナオ」

「え？」

「俺は汚れてるから」

私はさっきまで握り締めていたカイロを落としてしまった。それと同時に屋上のドアが開く音がした。

誰だろう・・・ダイキの友達？

予想はハズレた。

私とダイキの前に居るのは優也で、いつもの頼りない笑顔は顔から消えていて
優也の顔には疑いと混乱と怒り、そして相当走ってきたのか疲れも混じっていた。

「優也・・・？」

「何で、ここにいるんだよ」

「ダイキと話しに来ただけ」

すると優也はダイキをキツと鋭く睨んだ。

一方ダイキはタバコを口にくわえて余裕の表情を見せている。

「2人・・・だけか？」

「そうだよ」

つい、強気になってしまった。気が立っていた。そのせいかもしれない。

「あのさあ・・・」

「ナツコちゃん、待ってるんじゃない？」

優也は少し悲しそうな目を見せた。

そして、私とダイキを交互に見たあと、少し後ずさりしながら戻っていった。

「ええの？あんなこと言つて。」

「いいよ。別に。」

「男の心は意外と傷つきやすいねんぞ？」

「・・・いいよ。もう。」

仕返しをするつもりは無かった。

だからと言って、ただ、優也とナツコちゃんを認めるのも嫌だった。

こんなことなら、恋なんて、しなければ良かったんだ。

「好きなら。謝ったほうがええんちゃう？」

「・・・」

「辛く当たったんは、ナオが寂しくて、悲しかったからやる」

顔が熱くなって、目から涙が零れ出た。

ごめん・・・優也。

「ナツコちゃんと仲良くて・・・本当は・・・悔しかったんじゃない・・・悲しかった

優也のせいじゃないのに・・・優也、傷つけちゃった・・・」
「うん。分かってる。」

途切れ途切れになりながら、必死でダイキに言葉を伝えた。

ダイキは頭を撫でてくれた。

大きい手の平で頭を優しく撫でてくれている。
これが、一番、安心するんだ。

「ごめん・・・優也・・・」

「それは、俺じゃなくて、前っちに言うもんやで」

「うん・・・」

「ほら。言っておいで」

まだ・・・もうちょっと・・・ここで泣かせてほしい。

冷たい風が心地いいこの場所とダイキがいる、ここが私の唯一の泣ける場所。

私の涙が止まって目の腫れも収まったところ、ふと、昨日優也から届いたメールを思い出した。
ずっと、受信ボックスに放置しっぱなしだった。

『今日は、保健室に運んでくれてありがとうYO（<ー>）』
何がありがとYOだ。

次のメール

『明日、帰りにアイス奢ってやる』

えらそうに……。大体、今の季節は冬だっつーの
私の顔に笑顔がもどったようで、ダイキは嬉しそうにまた空を仰いだ。

明日って、今日だよな。今から謝って、奢ってもらおうと。

ダイキに別れを告げて屋上の階段を下りて
教室へと戻った。

青木と数人の男子が取り巻いて、話をしていた。
さっきの状況を思い出す

「でもさー、駒井夏子、本当に可愛いよな」

「あの可愛さは、そこいらにいるアイドルなんかよりよっぽどもんなあ」

「でも俺てつきり前っちは滝村と付き合ってると思ってた」

他の男子たちも一斉に頷いた

「俺も俺も」

「けど、やっぱり男だったら可愛いほうを取るよな。」

一瞬、クラスがシンと静まり返った。

理沙が不安そうに私を見ている。

きっと、クラスの大半が私を見ていただろう。

さっき、「男だったら可愛いほうをとるよな」とか言っていた男子、森本は青ざめた顔で私を見ていた。

私は森本のまわりつくような視線を払って自分の席に着いた。
まだクラスは静寂のなかだ

「いや！違うんだって滝村！可愛いほうを取るって言ったのは・・・

その……

言葉の絢つていうか……」

「……」

「でもさあ。本当のことじゃね？」

森本が必死でフォローしているのにもかかわらず

クラスの中でも空気が読めないことで有名な村田が呟いた。

そっか。そうだよ。可愛いほうを選ぶんだよ。

今まで何でそんな簡単な事に気が付かなかったんだろう。

所詮顔だもんね。

ああ……切ないなあ。どうしてこうも報われないんだろう……

涙出そうだ。

けど、意地でも出さない。こんな奴の言ったことに負けたなんて思いたくもない。

理沙に手を引かれ、教室から出た。

出たあとに聞こえた声は、森本と村田への大ブーイングだった。

「ほら！奈緒！！気を確かに持て！あんな奴の言うことなんか気にする

お前ではなかったらうー！！」

「気にしてないよ。」

「気にしてる。」

「気にしてないって」

「だって顔が気にしてないって顔して無いもん。」

凶星だ。

私は顔に物事とか、思っている事が出やすい。

こんな自分が嫌いだ。

隠し事が出来ない。

そのとき、二人で仲よさそうに歩いている男女とすれ違った。顔は一発で分かった。

優也とナツコちゃん

当てつけかと思うほどに密着していた。さすがに、これは、堪えるな……

寒さか、感情か、体が震えた。

第七話

嫉妬

優也とナツコちゃんを見た日からもう1週間がたとうとしている。
時間は早いものだとつくづく思う

今年の冬は例年を大幅に上回る寒冷前線が訪れるらしい
まあ、簡単に言うとなれば寒くて長い冬になるようだ。

世の中じゃあホワイトクリスマスになるとかなんとか言って騒いで
いるけど
私にとっては正直どうでもいい。

屋上に入り浸ってダイキとよくいるようになった。

今日も寒い中、屋上へと向かう。

ドアをあける

ああ。まただよ。

ダイキは前と同じように女を連れ込んでいた。私は大人しく屋上のドアの前にしゃがみ込む。女が出てくるのに、時間はかからなかった。

今日の女は香水の匂いがキツイな・・・

そんなことを思いながら
ダイキに近寄った。

「あの人、香水臭い。」

「ああ。カナな。鼻マヒした」

「ねえ、何人だっけ」

「何が？」

「女」

「今のカナを合わせると・・・ちょっと待ちや」

そういうと、ダイキは携帯を取り出してメモリーをチェックし始めた

「1、2、3、・・・13人」

「さすが新宿の帝王」

「まあ、俺にかかればざっとこんなもんやって。ホンマに新宿制覇してみようかな」

明るく笑い飛ばした。
ダイキは、タバコをポケットから取り出して火をつける。
もう何回も注意してるのにやめない。

「体に悪いって」

「大丈夫。俺は強いから」

「肺が真っ黒になるよ？」

「そんなん、構わんわ。中身なんて誰も見いひんねんから」

「中身はどんどん外にでてくるって知らない？」

「知らんそんなん」

私はダイキから携帯を借りて
メモリーを見ていいか確かめた。返事はいいとのことだったから、
何のためらいもなく見た

「エミ、トモミ、ヤスコ、ショウコ、ハルナ、スマレ、ケイコ、ア
ユ、レイコ」

「エツミ、ラン、アヤ、カナ……全部彼女？」

「彼女がそんなに居るわけないやろ」

「すごいね。一番上は何歳？」

「27。キャリアアウーマンっちゅうやつやな。」

「じゃあ、下は？」

「中3やから、15か。」

「うわ。中学生にまで手出してるし……」

「寄ってくるねん。俺の魅力に」

ダイキの顔が、ふと切なく動くのを私は見逃さなかった

「何でそんなに女作ってるの？」

「寂しさしのぎ」

寂しさしのぎ……

「この中に、一番好きな人はいる？」

「おらん。」

「今まで、本気の恋って、ダイキしたことある？」

ダイキが急に黙り込んだ。

じっと、動かない。

そう思うと、突然体が後ろに倒れてダイキは空を見上げた。

こんなに地面は冷たいのによく寝転べるなあと思いながら、私は、

ダイキの

見つめる空を見た。

大きな雲が私たちを取り巻いているようだった。

「あるよ」

その声がいつもよりすごく悲しそうに聞こえて、私は何故だか、優也を思い出した。

「どんな？」

ダイキは少し笑ったかと思うと起きて立ち上がった

「今日はもう帰るわ。急に最近寒くなってきたし。」

触れちゃいけない過去だったのかな。

ダイキが無視することって、珍しい。

あえて、私は何も言わず、ダイキを目で見送った。

ダイキは放っておけない。私がいなくちゃ、ダイキはまた一人になっちゃう。

寂しさを抱えて生きることになる。

「うん。気をつけて」

「ばいばい」

ダイキが帰った後、私も少しボーっとした後、教室に戻った。
あの日以来、森本は私に妙な気を使うし、村田は相変わらず空気が
読めていない。

たいして変わりのない日々。

唯一変わったことといえば、優也とナツコちゃんのことだ

「奈緒」

理沙は少し気を使いながら私に話しかけてきた。

「ん？」

「最近、北見といるんだって？」

「ああ。そうだね」

「大丈夫？」

「気にしなくていいよ」

「でも、」

「ダイキは、いい奴だから。」

「奈緒がそういうなら別にいいんだけど」

すると、理沙がハッと思い出したように言った

「もうそろそろ文化祭だね」

「ああ。何するんだっけ」

「着物着てなんかやるやつ・・・えっと・・・なんだっけ」

偶然そばにいた青木に問いかけた

「和風喫茶つてどこじゃなかったっけ」

「ああ。それぞれ」

「和風喫茶か・・・」

「女子が着物。男子が袴」

「着物は担任が持つてくるんだろ。人数分」

「担任男じゃなかったっけ？」

「あれだろ。担任の親が着付師なんかやってて。」

着付師ねえ・・・着物なんかきて、ちゃんとできるのか？

「でも、ちよつと楽しみじゃない？」

理沙がハイテンションに言った。そういえばコイツ、昔から祭とか

には浴衣着てきたなあ

「あたしは、別に、何でもいいんだけどね」

「奈緒は絶対着物似合うよ!!」

「そうだったらいいんだけどね」

「3年は劇するんでしょ？ロミジュリ。」

「またありきたりなところに目を付けたね」

「1年は調子にのって魔女の宅急便の劇するらしいし」

「へえ。主人公は？」

急に理沙の顔がハツとしたように暗くなって、私の顔をうかがうようにした

「・・・駒井ナツコだって」

ああ。ナツコちゃん。キキの役やるんだ。似合いそう赤いリボンなんて頭に巻いて

黒いワンピース着て、箒にのる。

可愛いだろうな。

「そりゃあ可愛いだろうね」

あえて、感情を覗かせないようにそっけなく言った。

「それで、文化祭の最初、フィーリングカップルの紙が渡されるんだった」

「フィーリングカップル？」

「男子と女子、片方ずつ紙を配られて、もう一方の紙を持っている人を探し出すの」

「楽しそうだね」

紙を作る人は大変だろうな・・・

なにせ、ウチの学校の生徒数は1000人以上を誇る有数の学校だから。

今まで私が顔を見たことのない生徒が少なくとも800人はいるな。

ってことは、そんな1000人以上の人の大半に知られているダイキってすごくない？

日は刻々と過ぎていき

あつという間に、文化祭前日。

私たちのクラスは喫茶店ということで大して準備もしていない。

けど、厨房担当の男子は毎日必死で料理の研究をしていたようだけど

去年ほど、私は盛り上がれていなかった。

放課後、体育館を覗いてみた。

ロミオとジュリエットが見れるかもしれない。

今年のロミジュリは普通のと一味も二味も違うらしい。気にはなっていた。

けど、体育館に行ってみると私の期待していたロミジュリはやってなくて

代わりに魔女の宅急便をしていた。

「・・・黒猫のジジを飼っているの」

黒いワンピースをきて大きなりぼんを頭に付けて

舞台をこれでもかというくらいに明るく華やかに見せる。

軽い動きで舞台を駆け抜け、黒のワンピースが色白の肌をよりいっそう綺麗に際立たせた

可愛い。

これ以外に言いようがない。

『男だったら可愛いほうを選ぶよな』

『でも、本当のことじゃね?』

頭の中で二つの言葉が踊りだす。

うづく胸。硬直する手足。まばたきの回数も増える。

足早に、体育館を去った。

石をけりながら家路へと向かう。

なんか、いじけてるみたい。少し笑えた。

いや、無理やり笑った。

暗闇は私を孤独の世界へと導き、寒さは私の憎しみを一層深めようとする。

悔しいんだ。

可愛いナツコちゃんに嫉妬している

さっきまで蹴っていた石ころが溝に入ってますます憂鬱感が募ったとき、すぐ横の公園に
優也の姿を見つけた

どうしよう・・・話しかける？

心臓がさっきの倍に大きく高鳴った

けど・・・この前冷たくあしらったのはあたしの方だ・・・
許してくれるわけない。
笑ってくれるわけない。

けど・・・もしかしたら・・・許してくれるかもしれない
もしかしたら、笑ってくれるかもしれない。

優也に話しかけようと公園へ足を一步前へ進もうとしたとき

「ナオ。何しよん？こんなところで」

ダイキが肩を叩いて話しかけてきた

「あ．．．えっと．．．。帰ろうかなって思ってた」

「じゃあちようど良かった。一緒に帰るかあ」

「そうだね」

優也を振り返ってみるのが怖くて一回も見なかった。
もしかしたら、見たかもしれない。私とダイキを。

「ナシヨ」

優也？

後ろを振り返ると優也がいた。

ダイキを見ると私に少し笑いかけて

「ごめん。俺急ぐわ」

と、足早に去って行った。

ありがとうとダイキの背中に語りかけ、気まずい空気を消すように話しかけた

「帰ろう・・・か」
「うん」

何を話していいか分からない。ずっと黙ったまま二人で歩く
今思ったら久しぶりだな。優也と帰るの

「あのさ」

第一声は優也だった

「ナシヨは・・・あの・・・何で最近ダイキというわけ？」
「え・・・？」
「ダイキと居るなよ」
「！何で」

ダイキと居るな？何であんたにそんなこと言われなきゃいけないの？
意味分かんない

「前に言っただろ？近寄るなって」

少し腹が立ってるようで話し方がキツイ。ムカついて言い返す。

「何で優也に指図されないといけないの!？」

「何？お前ダイキのこと好きなわけ？」

「は!？意味分かんない」

キツと優也を睨んだ。

「好きじゃなきゃ、一緒に居ないだろ？」

「あたしはただ、話聞いてもらったりしてるだけじゃん」

「ダイキに話し聞いてもらったって一緒だろ!！」

「何でそんなこと言えるの？」

「ダイキはそういう奴なんだよ」

「あんたダイキの何を知ってたんだよ!！」

「お前こそ！ダイキの何を知ってた!？」

「ダイキは、誰かが傍に居ないと昔の過去に飲まれるんだよ」

優也は一瞬ひるんだ

あたしは構わず続けて、とどめの一発をかました

「優也だって、いつもナツコちゃんと居るじゃん!！」

そういつて、逃げるように、あたしは優也に背中を向けて家までダ
ッシュした

なんてことを言っちゃったんだろう・・・

何であたし、こんなに意地っ張りなんだろう

もう嫌だ。

第八話

意地

こんなに全てが嫌になることは今までなかった。
なんで、優也はダイキのことを嫌ってるんだろう？

あんな風に言うなんてひどいと思う

『ダイキに話し聞いてもらってたって一緒だろ』

一緒なんかじゃない。むしろ、助けになる。あたしの不安を取り除いてくれる

優也の話を聞いてもらったりしてたのに。

何も分らないくせに・・・何も知らないくせに。

足元の缶を蹴った時、ふと気が付いた

あれ？何であたし泣いてるんだろう

ム力ついて泣いてる・・・そんなことはない。

悲しくて？悔しくて？

悔しくてが一番近いのかもしれない

優也に対してもだけど、あたし自身に対してもものすごく腹が立つんだ

どうして、ちゃんとダイキのこと説明できなかったんだろう。
どうして、逃げてきちゃったんだろう……

好きなのに……好きなのに、素直になれない……
あたしはどうしようもなく意地っ張り。

優也の顔を見るだけで、今までと違った感覚が私を取り巻くのに
どう動いていいのかわからない。
どういう風に優也に言葉を伝えたらいいのかわからない。

やっぱり、恋なんてするもんじゃない。
恋していいことなんてまるでない。

文化祭当日。今日は朝から忙しそうに皆動いていた。
もちろん、私も朝から忙しく動いた。

憂鬱な気分なんて引きずってられない

優也の姿はまだ見ていない。

男子と女子はすることが違うから。優也は厨房担当だ。

あたしら女子はウェイトレスみたいな奴で、昨日作りそこねていた、
手作りメニュー表を

切り張りして作った。結構可愛く仕上がっている

着物を持ってきたり、食器を数えたり。まあひたすら忙しい。

何気に注目されているらしい。ウチのクラスの和風喫茶は。どこが
いいんだかわからないけど

やっぱり、着物目当てが多いか？

そういえば、ダイキは今日も屋上にいるのかな？
せっかくの文化祭なのに。

「女子」着物に着替えて」

学級委員長の麻美が大声を張り上げて女子を図書室に移動させた
ポニーテールの似合う学級委員長。皆をまとめるのが上手いリーダー
格ってやつ。

少し男勝りだけど、女子からの支持率が高い。

一人一人着物の柄と色が違うようで

理沙は濃い赤の生地に紅葉の模様の入った着物を渡されていた。ま
さしく秋の文化祭にピッタリ。

私かというと、淡い青色の生地に白い花柄のシンプルな着物を渡さ
れた。

渡しているのは着付師をしている先生のお母さんらしきひと。一人
一人に似合った着物を
選んでいるそうだ。

この着物、あたしに似合うかな・・・

理沙はよく似合っている。他の子も。みんな和風美人だ。

先生のお母さんは嬉しそうに着付をしていた。

「やっぱり、若い子が着ると違うわね」。着物がイキイキしてるわ」

私も、一応着替え終わった。

「あなた着物似合うわね。ステキよ。柄もぴったりだし」
「ありがとうございます……」

ステキって……嬉しいけど。
動きにくいな。お腹苦しいし……。いっぱい食べられない。

図書室から出てクラスに戻る時の他学年や他クラスの生徒からの視線が
痛い……。着物は目立つな……。照れるし。
途中、新聞部の奴に写真を取られた。

文化祭が始まった。

やっぱり、和風喫茶は忙しい。着物の女子生徒を一目見ようと様々な人が波のように
押し寄せてくる。
今年は入場人数が多いらしい。まあ、生徒の数が半端ないから仕方ないといえばそれまでの話なんだけど

「魔女の宅急便」と「ロミオとジュリエット」は午後からの部らしく、あたしと理沙も
午後は丁度休憩を入れた。いろいろ見て回りたいし。
まあ、また和風喫茶に戻るからずっと着物なんだけど……

「いらっしゃいませ」

他校の生徒らしい男子3名が入店。私が店内まで案内することになった。

髪は茶髪、耳にバッチリピアス。パツと見の不良がやってきた。驚きはしなかった。さっきなんて校長と教頭と理事長らしき人が来たし（しかもあたしが担当したし）

不良どもは私をジロつと全体を見てからニヤツと笑った。気色悪い。

「ねえ。今何年生？」

席に案内してメニューを渡した時、3人の中で一番背の高い男が聞いてきた

「2年です」

「へえ。俺ら3年なんだあ」

別に聞いてないんですけど
理沙を見ると私を不安そうに見ていた

「これ終わったら、一緒に動かない？」

「いえ・・・忙しいので」

「え」

「ご注文は何にいたしましょう」

「じゃあ、君で。」

ゲラゲラ笑い出した。

何考えてんだこのアホどもは。ウチの弟よりもタチ悪いし

「そのメニューよりお選び下さい」

「頭かてえなあ」

「じゃあ、これよくね？白玉団子」

「白玉団子ですね」

「3つ」

「かしこまりました」

その場を一刻も早く立ち去りたかったから
そそくさと厨房へ戻った。

厨房って言ったって、教室の奥なんだけど。

まだこつち見てるし。。

「白玉3つ」

「はい」

疲れたと椅子にもたれかかりながら座った
こんなに忙しいのって何年ぶりかな・・・

「白玉・・・3つ」

私に白玉団子を渡してきたのは優也だった
私が思っているだけなのか、少し心配そうな顔をしているように見える。

「・・・」

黙って、店へと出た
何でも言わなかったんだろう・・・さっきが一番「ごめん」って
言えるチャンスだったのに

「白玉団子3つお持ちしました」

「ねえ。マジでいつてるんだけどさあ」

「けど・・・」

「仕事なんていいじゃん別に。」

「すいません。」

「えゝ。じゃあ、俺らここ動かねえしゝ」

困ったことになった・・・どうしよう。お客さんいっぱいだし

「申し訳ございません。ただいま混んでますので・・・」

「じゃあ、一緒に遊ぼうよ」

だから、それは無理って言うてんだろ!?

でも、今あたしがこの人たちの要望を聞かなかったらずっとこのまま居座るつもりらしいし・・・どうしよう

「だから・・・あの・・・」

「何?」

「どうしようもない奴らやなあお前ら」

聞きなれた関西弁。店内にどよめきの声が響いた

「はあ?・・・!お前・・・」

「もう食ったやろ。楽しんだんやったら店から出る」

「何様だあテメエ」

「ちょっと待てって・・・コイツ・・・」

3人のうち、一番背の小さい男子が隣の男子に耳打ちしていた

「はぁ。お前が北見大喜かぁ」

ダイキは呆れたようにため息をついて
見下したように3人を見た

「お前ら、営業妨害やから、出て行け」

男ら3人はガンを飛ばしながらダイキを見て
立ち去った。ダイキはその後に着いて行った

「なんだったんだろう・・・今の」

「ねえ今のって、北見大喜でしょ！！初めて見た！！」
「超カッコいいね！！」

店にいた女子生徒は一斉にダイキの話で持ちきりになった

あたしも少し頭が混乱しポーっとしてたら
いつの間にかお客さんが来てて、また仕事に戻った

それにしても・・・タイミング良かったなあ・・・
屋上から降りてきたんだ。

そして、あたし達午前で大忙しに動いていた女子は

午後の部の女子と入れ替わる。

「はあく。マジ疲れた。あたし接客無理っぽい」

エプロン（腰巻き？）を外しながら理沙はぐったりして喋った。

「客の接待なんかしてられっか！？って感じだよね」

「あはは。そんな感じ」

少しウキウキ気分で文化祭を回る。

「あ！唐揚げ食べよう！！お腹すいた」
「いいね」

唐揚げを買った。どうも、3年5組の出し物らしい。はちまきを巻いた威勢のいい先輩が唐揚げを渡してくれた。

やっぱり、他の生徒と違う格好をしていたからか、目立っているよ
うな気がしてしょうがない
自意識過剰かな……

いつもは寂しげな渡り廊下。今日は見事に派手なポスターやら生徒
の展示物でいっぱいになって
賑やかだった。

そこにピカソの絵にもなっていない意味の分からない絵があつて
それを見て理沙と爆笑した

立ち並ぶ出店や色んな格好をして宣伝をしている生徒

先生はなんだか照れくさそうに変装させられていたけど、どうもまんざらでもない様子で

パンダの着ぐるみは良く似合っていた。

忙しく動く生徒たち。普段の授業ではかったるそうにしていたり先生に反抗したりしているけどやる時はしっかりやって盛り上がるんだなあと

初めて感心した。

今まで見てきた生徒の中でつまらなさそうにしていた子は一人もいなかったような気がする

それにしても、ダイキは一体どこに行ったんだろう。

ピンポンパンポーン

「10分後より、3年2組の演劇『ロミオとジュリエット』これこそ運命！ホストとキャバ嬢」を

上映いたします。ご覧になる方は体育館へ来てください。

大変混雑する予想なので、体育館に入りきれない場合は2回目公演へ回されます。

それでは、学園祭をお楽しみください」

ピンポンパンポーン

「ホストとキャバ嬢！？」

「もっと悲しい切ない系の話かと思った」

「コメディー狙ってるんだろうね・・・」

「そろそろ行こうか。」

「そうだね。立ち見って嫌だし」

「それにしても、高校の学園祭の劇って2回も公演することってあるんだね」

二人でぺちゃくちゃ喋りながら体育館へ向かった

幸運なことに、席は思ったよりも空いていて、真ん中の方の席を陣取った。

その数分後から人数が一気に増えだして、2回公演する理由が分かった。

あっという間に満席状態。外は寒いのに、体育館は人の熱気でムンムンする。

ブーーーーー!!

けたたましいサイレンの音が、劇の始まりを示した

放送部の子の声が聞こえる。そういえば、さっきの声もこの子っぱいな。

忙しいんだなあ放送部も……

「ただいまより、3年2組生徒による演劇『ロミオとジュリエット』これこそ運命！ホストとキャバ嬢」を

お送りいたします。監督、北原一くん。脚本、遠山アサミさん、……

幕が上がって最初に目に入ったのは、髪をアップに上げてキラキラのドレスを着た

化粧の濃い女と、丸いテーブルと、その周りに座っている男数人。

うわぁ・・・風俗店だよ・・・

テーブルの上に乗っているグラスやワインボトルなどの小道具もバツチりそろっていた。

中身は入ってないだろうけど・・・

あ。先生もテーブルに座ってる。先生も出演するんだあ

その世界は、いかにも風俗店って感じで、誰がこんな風にセッティングしたんだろうと

疑問に思うほどリアルだった。っていうか、高校生がそんな劇していいのか？

ストーリーは、キャバクラ嬢としてナンバー1を勝ち取り続けている女ジュリエット（源氏名）と、

ホスト界で名を轟かせ続けているナンバー1ホスト、呂魅男（ロミオ：源氏名）とのラブストーリー。

）
S

T O R Y ）

舞台は歌舞伎町で対立し続けてきたロミオとジュリエットの店。

売上金を伸ばすため、双方の店に潰し客を仕掛け合うもののお互いのナンバー1に負かされ続けた。

そしてついに、呂魅男はジュリエットの店へ最終兵器として潰しに

入った。

そこで呂魅男はジュリエットと出会う。一瞬で恋に落ちてしまう二人。

だが二人の恋が結ばれるはずもなく、周囲から反対される。敵対し続ける双方の店。

愛し合う二人はやがて、決意を固めることにする。駆け落ちをする。

ナンバー1の座を捨て、二人で新しく店をだすことになった。

自分の元いたクラブから選りすぐりを集め、クラブ「エターナルラヴ」を開店。

ホストクラブもキャバクラも楽しめる店をオープンし、大繁盛。

そして、その名は永遠に歌舞伎町に……いや、世界中に残すほどの大きな店となり、呂魅男とジュリエットは

幸せに大富豪生活を楽しむのであった……

ラストは大喝采のなか、大きな拍手に包まれて終わった。

最高に面白かったし、最高に盛り上がった。

まあ、原作のロミオとジュリエットとはだいぶかけ離れているけどこっちも面白い。っていうか、こっちのほうが、あたしは好きかな

今気付いたけど、この話を作った遠山アサミって人……すっごい頭のいいメガネをかけた

いかにもマジメそうな人じゃなかったっけ……いや……人は見かけに寄らないな……

ピンポンパンポン

「次の公演は午後5時30分よりとなっています。」

続いては、1年3組による演劇『魔女の宅急便』を公演いたします。
3時15分よりとなっております。
どうぞお楽しみに」

ピンポンパンポン

「ぎりぎり、見えるじゃん」

「奈緒、見るの？」

「え？見ないの？」

「奈緒が見れるならいいんだけど」

「普通に見えるから」

理沙はあたしのこと何気に心配してくれてたんだな。
ナツコちゃんのことなら別に平気。・・・大丈夫。

あっという間に15分がたった。

ピンポンパンポン

「ただいまより、1年3組による演劇、『魔女の宅急便』をお送り
いたします。

監督、入江孝俊君。脚本、須藤力ナさん・・・・・・」

ブーーーーー

最初に目に入っただのは黒いワンピースを着て、赤いリボンを頭につけて黒猫のぬいぐるみを持った
可愛いナツコちゃんだった。

目を奪われるくらいに可愛くて。

あたし、何て身の程知らずなんだろうと、深く深く思った。
もしかしたら、あたしのほうが優也と仲がいいんじゃないかなんて
思っていた

あたしは何てバカなんだろう。超ミジメじゃん。

優也も、この舞台見てるのかなあ
出来れば、見て欲しくない。

なんだろう。すごい今、虚しいよ。

今まで、何であたし気が付かなかったんだろう。
結局、大切なのは心とか言ってる人も、所詮は綺麗なほう、美しい
ほうを選ぶんだ。

見た目さえ良ければ、人に認められる。

見た目さえ良ければ、何だって出来るんじゃないだろうか？

〈STORY〉

ジブリ映画の魔女の宅急便と、話は一緒だった。
魔女見習いのキキが黒猫のジジを連れてロンドンの町へと修行の旅

に出る。

そこで出会う人たちと触れ合うたびに成長するキキ。

途中、魔法が使えなくなったりもするけれど、最後には戻り、町中の人気者になる（？）

みたいな感じ。

その役を、見事にナツコちゃんは演じきっていた。

キキの役もすごく良く合ってるし、会場の人もきつと、ナツコちゃんに見入っていたと思う。

だって、容姿がいいもん。

ものすごく嫉妬してしまう私は、先輩としてなっていないし
まだまだ子供だと思う。

けど、彼女の溢れんばかりの才能や美貌に、私は飲まれているのが
分かるんだ。

なんだ。あたしって、大した事ない人間じゃん。

静かにそう思った。

劇が終わったあと、理沙と体育館から出た

「すごかったね。1年生って言っても、やっぱり、あなどれないな」

「・・・奈緒、本当にそう思ってる？」

「思ってるよ？ナツコちゃん可愛かったね」

「うん・・・可愛かった・・・」

「どうしたの？」

理沙は少しためらうように目線を落とした

「奈緒の顔、劇中に見てたら、すごい辛そうだったよ」

辛そう？何で？

「無理して笑おうとしてさあ。」

「あたし・・・無理に笑ってた？」

「うん」

そこからは二人とも黙りこくつて、和風喫茶に戻った。
優也の姿は見えなくて、

ああ、見に行っただろうな

と、思った。

あたしの恋も終わったなあ。

第九話

嫌悪

着替えるまでに、時間があって。

理沙のところに行っただけ、理沙は彼氏の後藤君と記念撮影をしていて

とてもじゃないけど、その二人の間に割って入り込もうと思えなくて仕方なく、ダイキのいるであろう屋上へと行こうと思った。

ぎい……

錆びれたドアの音が鳴って、あたしはいつもとは違う服装で、いつもとは違う時間帯に屋上へと足を踏み入れた。

「ダイキ」

いないのかな。さっきの不良3人組とどっかいったとか？

「ナオ？」

「わ……いたんだ」

ダイキは普通に仰向けに寝そべって、暗くなつた空を見上げた

「どないした和風美人」

「和風美人って……」

「よう似合つとうで」

「ありがとう」

借りた着物で寝そべることは出来なかったから、仕方なく、段差に腰をかけた。

「あ。劇見た？」

「ロミオとジュリエット？見たで」

「面白かったよね」

「リアルに再現できたんは、まあ俺のお陰やけどな」

「はあ？」

「助言したってん。ここはこーしたらええんちゃうかって」

「さすが。歌舞伎町の帝王。」

「この間は、新宿の帝王とちゃうかったっけ？」

二人で笑った。

ああ。何か、久ぶりに安心したような気がする。

ダイキの力って奴か？

「魔女の宅急便は？見た？」

「・・・見たで。」

「可愛かったよねーナツコちゃん」

「・・・」

ダイキは少しはぐらかすかのようにタバコを取り出して火をつけた

「あたし、ずっと思ってたんだけどさあ」

「何を」

「何で皆、あたしがナツコちゃんの話しようとする態度変わんのかな？」

「・・・」

「別にあたし、ナツコちゃんのこと嫌いなわけじゃないよ？」

ダイキは黙ったまま、タバコをふかす
遠いところを見つめたまま

「むしろ、可愛いと思う。性格は知らないけど、顔可愛いし、スタイルもいいし。」

小柄で愛嬌があって、笑顔がすごく似合うじゃん。内面から滲み出たものって言うのかな・・・
魅力的で・・・」

ふと、さっきまでの安心感が消えて、また不安が募った

「あたしなんか、比べ物にならなくて・・・やっぱり、男って、顔がいいほうを選ぶのは当然なんだよね

そうだよ・・・」

「ナオ」

「めんどくさくなったんだ。優也のこと。何であたし好きになっちやっただろうって」

「もう止めって」

「好きになったって、どうにもならないのにさあ。」

「ナオ!!」

ダイキは大声を張り上げた。
びっくりして私はひるんだ

「・・・ごめん」

「いや。大声出しすぎた。」ごめん」

沈黙が流れる

ダイキは、あたしの方へと寄ってきて、頭を撫でてくれた

いつもは安心するはずなのに・・・なんでだろう。悲しくて仕方がない。

「あたし・・・なんで・・・なんでこんなに可愛くないんだろう。意地っ張りで、泣き虫で・・・どうしようもなく嫉妬深い。」

「ナオは可愛いよ。」

「・・・」

「ナオは可愛い。駒井ナツコなんかより、ずっと可愛いで」
「嘘つき」

「嘘なんかついてへんよ」

「可愛くなんかないもん」

「ホンマやって」

「・・・あたし、ダイキを好きになれば良かったな」

ふと、この言葉が出た。

ダイキを好きになってれば、あたしは幸せだったはずだ。けど、ダイキのこと好きだったら毎日嫉妬で狂いそう。

そのとき、屋上の扉が開いて理沙が出てきた

「奈緒。ミーティングだって」

「うん分かった」

理沙はダイキを少し怪訝そうに見て頭を下げた

「じゃあ、ありがとうダイキ」

「・・・ええよ」

屋上の階段を下りるとき、理沙が大そうビックリした様子であたし

に話しかけてきた。

「何！？あんた北見ダイキと付き合ってるの!？」

「違うよ。ただ話を聞いてもらっただけ。」

「目。真っ赤だよ」

慌てて目をこすった。まだ少し熱を帯びている

「話なら、いつでもあたしが聞くから。」

理沙は優しくあたしの背中をさすってくれた。理沙の優しさは大き
くて、

ダイキがお父さんなら、理沙がお母さんみたいだなと
無駄なことをポーっとする頭で考えた

着物を脱いで、制服に着替えた。

「本日の売上金・・・10万5千893円なり〜」

ワアアっと言う歓声が教室中に響き渡った。

1日で10万って、大したもんだよ。

「売上金は、全額、寄付という形になってるからなあ」

担任の一声に、大ブーイング。

「えー！？ウチらが働いたお金なのに」

「そのかわり、ジュース用意したから。皆良く頑張ったな」

先生は付け足すように言って廊下に置いてあった紙パックのジュースを一人一人に渡していった

「ちなみに、このジュースは校長先生からのプレゼントです。感謝して飲むように」

校長先生・・・やっぱり、あなたは優しい最高の校長だよ

ジュースも飲み終わり、皆文化祭の余韻に浸りながら興奮気味にそれぞれ下校した。

理沙とは、別々に帰った。彼氏と帰ったんだと思う。

途中、ダイキに会って一緒に帰ることにした

「ダイキはさあ、あの後どうしたの」

「ん？」

「3人組」

「ああ。黙って帰っていった。面白くないからから揚げ買って、食ってたら

アナウンスがかかって、劇見に行った」

「黙って帰っていったんだ・・・」

「ガン飛ばされてたけどな」

二人で談笑しながら帰っていると、優也とナツコちゃんが私たちの前を通っていた。

一瞬あたしは立ち止まりそうになったけど、もうどうでもいいから何も気にせずダイキと喋る。

途中、優也と目が合った。けど、ナツコちゃんに腕を組まれてまたナツコちゃんに視線を戻した

身長差は丁度いい。優也は大きくて、ナツコちゃんはちっちゃくて・
・・

ム力つく。ム力つく。

だからあたしも、ダイキのブレザーのすそを掴んだ。
もつと、ゆっくり歩いてって。

合図した。

ダイキはゆっくり歩いて、いつの間にか優也とナツコちゃんは見えなくなった。

「ダメだ。あたし」

「ナオ？」

「まだ。吹っ切れてないよ」

「・・・」

「まだ・・・まだ・・・あたし・・・優也のこと好き」
「・・・」

下を向くと、涙がパタパタ、音を立てて落ちていく。

あたしの涙の雫が地面に残って、道しるべになっている。

「好きだよー・・・」

声まで出てきた。わぁんと、子供みたいに泣いてしまう。
あたしは、まだまだ子供だ。

黙って、あたしの頭を撫でてくれるダイキは大人で。
大人にすぎり付いて、迷子になったかのように泣いた。

本当に、あたしは迷子だ。

どこに行こうかも分からない。どの道を選んでいいかも分からず、
立ち止まって
泣くしか出来ない。

好きなのに、伝わらない。

何を伝えていいかも分からない。

意地を張って、優也とケンカしたけど
意地を張ったから、あたしは今どうしようもなくもがいてる。

底なし沼に足を踏み入れたかのように、浮力もなく。
重力のまま、引きずり込まれるんだ。

意地っ張りなあたしがきらい

可愛くないあたしが嫌い

子供のあたしがきらい

何も分からない自分が嫌い

嫌悪の気持ちは、消えなくて。

ダイキに手を引かれるまで、ずっとその場で泣き続けていた。

初めて優也と手を繋いだ時のことを思い出すと、もっと、もっと寂しくなった。

寒い、寒い、高2の冬。

あたしは路頭に迷ってます。

第十話

変化

文化祭も終わり、2学期の行事は全て終わった。後は、終業式を待つばかりでなんら変わりのない日々をぼおっとしながら生きていくのみ。

ぼおっと生きていたらどれだけ幸せだろうな。

学校ですれ違うのは優也とナツコちゃん。

どうも優也はナツコちゃんの劇を見たらしく、私の聞こえる範囲でその話題が尽きることはなかった。

「ナツコ演技うまかったぞ」

「本当？」

「マジで」

「うれしいな」

辛く感じることも、悲しくて涙がこぼれそうになるのも。

今の今まで全部隠し通してきた。

けど、ダイキの前では弱音を吐くことができて

ダイキの存在だけであたしは今まで成り立ってこれたのかもしれない

今日も、あたしは屋上に行った

「ダイ……」

ドアを開けると、ダイキは携帯で電話をしていたようだった

「うん……まだ居るで……」

何の話をしてるんだろう

「俺には無理やねん……ああ。うん……」

無理？

「俺は……まだ……ハルのこと」

ハル？ハルって誰？もしかして、この間ダイキの言ってた本気で恋してた人のこと？

「まだ……心に残ってる」

ほら。予感的中。別れたのかな？

「……分かってるねん……分かってる。」

もう居らんことも。終わったんや！ハルは……俺のせい……」

ダイキは一呼吸置いた。

「俺が殺したんや」

一瞬、世界中の音が消えたかと思った。

スカートが風ではためく音も、耳元で唸る風も、街の車の音も全部消えたかと思った

呆然としているとダイキは電話を切り、くるりと体をこっちへと向けた。

驚いた顔をしたけど、またすぐ落ち込んだような、絶望のような顔をした。

「あ……ダイキ……」

「……………」

「あの……盗み聞きするつもりはなくて……その……」

「……言ったやろ」

「？」

「俺は、汚れてるって」

ダイキの綺麗な茶色の髪が風になびいて、その空間だけ異世界のようを感じる

「あたし……」

「もう。俺と居らんほうがええ。そっちのほうが、ナオにはいいやろ」

「違う」

「俺と居らんかったら、前っちとも仲直りできるやん」

「ねえ」

「今までありがとくな。仲良うしてくれて」

「聞いてよ!!」

ダイキがあまりにもノンストップで話を進めるものだから
言いたいことがずっと喉元に引っかかっていた

「あたし、ちょっとその話聞いちゃったけど・・・何も分からない
よ！」

何も分からないのに、俺と居らんほうがええって・・・そんな、勝
手すぎる!!」

「・・・」

「あたしは、ダイキに何回も何回も救われた。だから、今度はあた
しがダイキを救う番だと思う
だから・・・あたしにも、ダイキの話聞かせて」

ダイキは節目がちに下を向いた。

そして、いつもみたいに呆れたように笑って、さっきまでくわえて
いたタバコを地面に
落としてあたしを見据えた。

「もう3年たった。」

「？」

「そろそろ、誰かに救ってほしいなあって思ってたん」
「・・・」

「ナオに、聞いてもらっていいか？」

「あたしでいいなら」

そして、ダイキは喋りだした。もちろん、ダイキの手にはタバコが

乗っけて

つい最近気が付いた、ダイキにとってタバコは精神安定の薬なんだと。

だから、あたしは、ダイキに禁煙を勧めることをやめたんだ。

第十一話

解明

「俺な、昔から女とはよう関係持っとったんや」

「ああ・・・」

「で。一人だけ、今までで一人だけ俺の中で1番の女がいた。

そいつとはクラスが一緒に、まあ、最初はただのクラスメイトやったんや。

ある日そいつ・・・まあハルって言うねんけど、ハルと俺がたまたま日番任されて、

俺行くつもりなくて。サボろうって思ってたん。そしたらハルが屋上まで来よってな。

「明日絶対来い！！」って、強く言うてくんねん。

ムカついたからそいつ脅してんけど、聞かんくて・・・結局俺は初めて女に負けた。

生まれて初めて日番の仕事ってやつをやったん。

放課後な。日番日誌と一緒に書くことになって。

たった1日しかハルと過ごしたことないのに、なんか気になるねん。ハルのことが。

今まで俺に刃向かった女なんておらんかったし、新鮮やったんかもしれん。

で。好きになった。その日、一緒に帰って、告って。付き合った。

そのうち、俺、どんどん頭悪くなって。まあ、授業受けてなかったからしゃあないねんけど

ムカついて、女遊びばっかやっててん。ハルおるのに。

気が強いって思い込んでた。ハルやったら離れへんって、どこからそんな自身が来てたんか

今でも分からん。けど、そう思い込んでた。

ハルは、ずっと抱えててんな。俺のこと。好きやったんや。

俺も、ハルがめっちゃめっちゃ好きやった。

そのうち、ハルの家庭環境もよくなって………薬に、手出しよった。」

一瞬、ダイキが詰まった

「抜け出されへんかって。俺、そのうちハルをほっつとした。なんか、目が正気とちゃうねん。

怖くなって……。そしたら、1カ月後、ハル飛び降りた。ここで

」

風が吹いた。強かった。

「俺が、今でも屋上から抜け出されへんのは、ハルへの罪の意識が
らなんかもしれんな」

ダイキはハル（さん）が飛び降りた場所らしきところに立って、
下を見た。

「ホンマ。正気ちゃうかったんやろうな。ここから、よう飛び降り

れるわ。」

「ダイキは・・・ハルさんのこと、もしかして、今でも待ってるの？」

ダイキの動きが止まった。

「罪の意識とかいうけど、本当はそんなことなんかじゃなくて・・・ハルさんが

自分を迎えに来てくれるの・・・待ってるんじゃない？」

「そんなん待ってへん」

「・・・・・・」

二人の間に、沈黙が流れた。風の唸る音しか聞こえない。

「ナオには・・・」

私の名前でハツとした

「ハルと。同じものを感じたんかもしれんな。」

「同じ・・・」

「初めて俺を見た女は大概目をギラつかせるか、恐怖で逃げるかのどっちかやねん。」

「・・・・・・」

「ナオは、どっちもなかった。ハルと同じ。」

そして、ダイキはつづけた。

「俺は、ハルを待ってるんじゃないくて、ハルと同じ影を持つナオを待ってたんかもしれんなあ。」

ヘラヘラと

ダイキは笑おうとした。けど、目からは大粒の涙が溢れていて、ダイキを抱きしめることをあたしは躊躇わなかった。

「あかん」

ダイキは、あたしの腕を振り払おうとした。けど、あたしは怯まなかった。

「俺は汚れてるねん・・・俺は・・・この手で・・・ハルを」

「ハルさんを殺したのは、薬だよ!!」

「・・・」

「あたし、ダイキの恋愛に首を突っ込むつもりじゃない。

けど、ダイキはあたしをなんだかんだ言いながら、助けてくれたじやん

あたしも、ダイキを助けたい。」

風が、一瞬だけ止まった。

「何も言わないであたしを支えてくれたのはダイキだった。だからあたしも何も言わない。傍に居る。」

「・・・ありがとう」

今ならもう、ダイキのこと何にも怖くないよ。

ダイキが人殺しをしたなんて嘘だった。いつも隣に居る女はみんな寂しさしのぎ。

他の誰よりも、たった一人の人を愛して、たった一人ですっと抱えていた。

普通の人とは少し違う恋愛をただけ。
何よりも純粹じゃん。

何もおかしい事なんてないじゃん。

どうして人って、偏見で差別するのだろう。

しばらく、ダイキの傍に居た。

泣き止んだダイキは大きく伸びをしてスッキリしたと叫んだ。

たったこれだけで、3年間の痛みがスッキリするわけもない。
だから、あたしはこれからもダイキのそばにすることを決めた。

嫌いになれたら、どれほど楽だろう？

あたしは、優也の顔を思い浮かべた。

冷たいものが、頬に触れる。

空を仰いだ。

「雪だー……」

初雪は見事に天気予報どおりに降り出してきた。

「こりゃあ寒いな」

「どうするの？」

「中、入るか」

「違う。今までどうしてきたの？」

「あまりに寒かったら、女の家に行く。」

「あ。」

前言撤回。

何よりも純粹なんかじゃないです。この男は。

教室にもどることにした。

教室は暖かく、生徒たちのざわめく声に、女子の香水の匂いが混ざって

なんだか、気分が悪くなりそうだった。

席に戻ると、

隣の席に居るはずの優也の姿がなかった。

少し気になってしまう。

窓の外を見ると雪がしんと降り、何故だかいつも以上に寂しい気分になってしまう。

今日は理沙も、風邪を引いていない。あたしも早退しよっかなあ。

丁度そう思ったとき、教室に担任が入ってきた。

「前市はどこいった？」

「サボリじゃないっすか？」

右斜め前に座っている男子がたるそうに言った。

先生はため息混じりにまったく・・・と言い、早速授業が始まった。

そこまで授業は進んでなくて。すんなりと頭を切り替えることができた。

でも、勉強に遅れてるって思ったらすごいむしゃくしゃするんだろうな。

ダイキの気持ち、少しだけ分かるかも

それにしても、ハルってどんな人だったんだろう。

ダイキが惚れるくらいだから、相当な美少女だったんだろうな。

あ。なんかまたムカついてきた

今日は早めに帰ろう。
放課後残って、また嫌な場面に遭遇するのいやだし。

家に帰ると、そこには亮がいた。

赤チエツクのパジャマを着てなんとも情けない顔であたしを出迎えている

鼻は真っ赤になり、目は充血気味で今にも倒れそうだ

これじゃあ、まるで赤鼻のトナカイじゃないか。

「何！？あんた風邪ひいたの？」

「うん、今日学校休んだ」

「風呂上りにパンツ一丁でうろろするからだよ・・・全くもう。」

「

あたしはそう呟いてフラフラしている亮を部屋に連れて行きベッドに寝かせた。

ベッドに寝かせる瞬間、ふと、あのときの場面を思い出した

頭の痛い優也を保健室に連れて行って寝かせたこと・・・

あの寝顔を見て、恋心を感じたこと

ナツコちゃん存在・・・

「嫌なこと思い出させるね・・・」

「俺のせい？」

「お前のせいだよ」

出そうになる涙をこらえて、
亮を寝かしつけた

第十二話

＼DAIKI&ALLSIDE＼交差

冬の放課後の教室はどこか寂しげだった。
その静寂の中、ダイキはブレザーのポケットに手をつ込みながら
颯爽と歩を進めている。

遠くを見つめるダイキの脳裏を掠める光景は、ハルが飛び降りた日
のことだった

もしあの時、ちゃんとハルのことを見ていれば、あんな結果になる
ことはなかったと

ずっと心の奥に秘めていた。奈緒に打ち明けたことで、再びこの想
いが蘇ってきたのだ

けれど、何故かダイキは奈緒に打ち明けたことを後悔してはいない。

いつにもまして、ダイキの心は晴れやかだった。

靴の音が響く4階の廊下を歩いていると
人の声が聞こえる。

こそこそと隠れて人の話を聞くななんて、ダイキは好きじゃなかったが
その声の主は前市優也と駒井夏子だと気付いた瞬間、体がかつてに

動いた

教室で見たものは、優也と夏子の抱き合っているシーンだった。けど、よく見れば、優也のほうが押されているらしい。

いつも自分でし慣れている事でも、いざ人を見るとさすがに緊張するわけで。ドギマギしていた。

ふっと、泣いている奈緒の顔が浮かんだ。

「大好き。優也。あたし・・・大好きだよ」

「・・・」

「ずっと・・・一緒にいたいよ」

そして、二人の顔が重なるうとした瞬間

これ以上見ていられなくなり、ダイキはその場を去った。

いつも浮かぶハルの顔。けど、今は、奈緒の顔が頭から離れない。

鼓動が高鳴った。

俺は、久しぶりに恋をしている。

奈緒が、ハルに似ているから？

きっと違う。俺は、ハルに似ているナオじゃなくて、ナオという人間が好きなんや。

思ったことがすぐ顔に出るし、喜怒哀楽が激しい。

純粹なところも、人一倍感受性が強いところも、涙もろくて意地っ張りなところも全部ひっくるめて好きや

子供やと思っていたけど、大きく包み込む母のような優しさもナオは持っている

ナオやったら・・・ナオと一緒におれば、変わるかもしれん。変わるかも知れん。

今見たことをナオに話して、自分のものにしよう。

けど・・・それを言って、奈緒はどんな顔をするやろうか。いつも俺に寄ってくる女とは訳が違う。そんな女は一言言うだけで付いてくる。

けど、ナオはそんな軽い女なんかとちゃう。

きつと、ナオは泣くやろう。

俺は、その泣いているナオを自分のものにできるんやろうか・・・

ダイキは校舎をでて空を見上げた。

ただ夕日に染まった羊雲が悠々と浮かんでいる

俺の恋は、どうも報われないように出来ているらしい。
笑っちゃうね。

途中、昨日約束していた女と会ったけど、断った。

とても、他の女を抱くような気にはなれなかったから
次の日、ダイキは珍しく朝から屋上に居た。

考え込んで夜も眠れずに、朝になったからだ。

しばらくして屋上に奈緒の姿が現れた。

奈緒をまっすぐ見ることは出来ず、下を向いて、タバコを取り出した。

「珍しいね。今日は早起きできたんだ」

「・・・ああ。うん」

「昨日ね、弟が風邪引いてさあ。大変だったんだよ」

「そうなんや」

「親は遅くまで帰ってこないし、兄ちゃんも昨日は結局仕事詰めでずーっと一人で看病してたんだよ。すごくない？」

「やるなあ」

奈緒らしい会話が始まって、

また和やかな気分になった。けど、その和やかな気分も長くは続かなくて

また、昨日のことをダイキは思い出した

言ってしまうのか、それとも、ずっと黙っていようか
どちらを取ったら俺は幸せになれるんやろう。

「そういえばね、昨日、理沙もいなくてさ、風邪で。優也も結局こ
なかつたな。」

またナツコちゃんとサボってたのかな。」

「ナオ・・・」

そのとき、屋上のドアが開いて、ナオの友達の理沙とか言うやつ
の顔が

ひよっこりとでて、俺を警戒した顔でみると、ナオをよんで出て行った。

せつかくのチャンスは見事に逃げていった。

これは、どういう風にとつたらええんやろうか。

ナオは、やっぱり前つちが好きなんや。

なんやかんや言っても前つちの話は出てくるし、俺のことは、所詮

ええお兄ちゃん程度にしか

思っへん。報われへんな。俺も。

第十三話

展開

今日は珍しく朝からダイキがいた。

やっぱり、昨日ハルさんの話したから気になって寝れなかったのかな
悪い事しちゃったかも。

ほら、ずっと話している最中だつて目線はあたしのほうを向いていない。

タバコをじつと見つめている。

こういう時つて大抵何か思い悩んでるんだよね。ダイキの場合。

あたしじゃ、やっぱりダイキの支えにはならないのかな。

そう思っていたとき、理沙が来た。

「朝からサボりはダメよ」

「はいはい」

腕をがっちりつかまれ、あたしは教室へ連行された。

教室はガヤガヤとにぎやかで、何故だか不思議と落ち着いた。
いつもはわずらわしくて仕方がないのに……

「風邪治ったんだ」

「うん。1日で復活」

「生命力強そうだもんね」

二人で談笑していると優也が教室に入ってきて、席についた。
そこに数人の男子が囲む

なんか、過去のいやゝなことを思い出すんですけど。

なんなの？昨日といい今日といい、嫌な過去ばかり思い出させやがって……

少しイライラしながら数人の男子の話に耳を傾けまいと、理沙と
の話を集中しようとした時

駒井ナツコと聞こえたから、つつい聞き耳を立ててしまった。

ああ、なんて愚かなんだろう。

「前っち、お前ってマジで手早いよなあ」

「え？」

「駒井夏子のことだよ!!」

「……」

「何したんだよ」

「放課後の教室で二人っきりで……」

気が付いたら、走り出していた。
理沙の声が遠くで聞こえる。

もう嫌だ。もう嫌だ。

バンッと大きな音を立ててドアを開けた
ダイキはかなり驚いた様子であたしを見ている。

けど、そんなことどうだっていい。もう嫌だ。全てが嫌だ

あたしは失恋したんだ。

結局、ナツコちゃんに負けた。

希望も失せて、ただあたしには絶望の2文字が浮かぶ。

ダイキの顔を見ると安心して飛びついて泣いた。

泣き虫。そんなんだからあたしは失敗するんだ。

意地っ張り。ずっと意地を張ってたからチャンスを逃したんだ
結局、あたしは優也と仲直りしないまままで失恋という形になった。

でも。それでよかったのかもしれない。

仲直りした後に、優也とナツコちゃんの話を知ったら、きっとすごく傷ついた。

でも、仲直りしてないままで知ったら、ものすごく後悔する。
ものすごく。

なにをもたもたしてたんだろう。
何を待ってたんだろう。

ダイキは、あたしの頭を撫でて
そして、包み込むように抱きしめた。

いつもとは違う慰め方。ビックリして何もいえない。
けど、もうどうだっていい。あたし、ダイキのものになったって、
もう構わない。

優也なんか大嫌い。
そう思うことにした。

ダイキはあたしを強く、だけど大切そうに抱きしめた。
ダイキの優しさをあたしは求めた。

「あたし・・・失恋しちゃったよ。」

「ナオ・・・」

「ナツコちゃんと、優也・・・」

「分かってる。言わんでええよ」

「失恋って、こんなに辛いなんて・・・知らなかった。」
「うん。」

ダイキはあたしの頭を撫でてくれた
安心する。

ダイキのこと、本気で好きになりそう。

「あたし・・・ダイキが好き」

「・・・」

「好きだよ」

「・・・あかん」

あたしは、ダイキの顔をみた。

「何で？」

「ナオが好きなんは・・・前市優也やろ？」

「好きなんかじゃない。むしろ大嫌い」

「自分に正直になれ」

「正直だよ」

「俺みたいになるぞ!!」

ダイキは強い目で、私をじっと見つめた。

私はその目を見返すほどの勇気なくなくて、下を向きながら吐き捨てるように言った。

「いいよ・・・もう」

「あかん!!俺が許さん」

「なんで?あたしの勝手じゃん関係ないよ!!」

「関係あるんじゃ!!」

声を荒げてダイキは言った。怖くなって、少し身をすくめると、ダイキは少し落ち着くように一呼吸置いた。

「お前にだけは、俺みたいになつて欲しくない!!」

「・・・」

「いつまでもハルのことばかり考えて、時間ばかりたつて・・・
ホンマに好きな人にも

素直に好きつて気付かれへんようになる・・・。俺は、今それで
苦しんでるんや!!」

「・・・」

涙がでて、ダイキの顔が見えない。

手で拭つても、後から後からあふれだしてくる。

ダイキは、あたしをさつきよりも強く抱きしめた。肩の後ろでどんな顔をしているのか分からない。

ダイキも苦しんでる。なんであたし今まで気付かなかつたんだろう。
ダイキが一番辛いんだよ。

それなのにあたし・・・ダイキに甘えてばかりで・・・
最低だよ。

「ダイキ・・・」

「ナオ。本間に、後悔するようなこと、するな」

「うん」

「分かったか？」

「うん」

「お前は一人じゃない。俺が居る。だから、間違つても自分に嘘は
つくな」

「うん」

そういつて、ダイキはあたしを離して頬にキスをした。
何が起こったか把握できないまま、ダイキはどこかへ行った。

なんだか、すごく疲れて、屋上の壁に寄りかかりながら目を閉じる
ことにした

寒い。けど、心地いい。

何時間経っただろう。

私は保健室に居た。

空はオレンジ色。夕方だ。朝からずっと屋上に居たんだ。

さっきのことを思い出していると頭が痛くなった。

風邪引いたんだ。

音がしない。先生もいない。
心細い。

静けさがあたしと、周りの空間を包んでいる。

すると、誰かの足音が聞こえた。

シャッ

ベッドの前にあるカーテンが開いた。

あたしは慌てて目を瞑った。寝たふりをしようと反射的に思ったから

「奈緒・・・寝てる。」

「そっか。」

「あたし、どうしたらいいかな」

「いいよ。先に帰って」

「奈緒、一人で連れて帰れる？」

「うん。大丈夫」

「奈緒にちゃんと言ってよ。今までのこと。」

「分かってる。」

「でないと、許さないから」

女の声はすぐに分かった。理沙だ。
もう一人は多分・・・優也。

シンとまた静まり返った。

頬に、温かい感触が伝わる。

目を開くと予想通り、優也がいた。

「起こした？」

「・・・ううん」

「あのさ・・・」

「あたし帰る」
「……………」

無言で手を掴まれた。

「離して」

「一緒に帰ろう」

「……………」

「完全に治ってないんだから」

「……………」

「今日、大喜が教室まできた」

「？」

「いい加減に、素直になれって言われた」

「……………」

「ごめん。意地張ってて」

「あたしも……………」
「ごめん」

やっと……………やっと謝ることができた。

なんて清らしいんだろう。久しぶりだ。

優也と仲直りできたよ。ダイキ。あたし、素直になれたよ

けど、問題がひとつ。

ナツコちゃんのこと

あたしは優也から少し身を離れた

優也はきょとんとしている

「ナツコちゃんと帰りなよ」

「・・・夏子、転校した」

「は？」

「転校。したんだよ」

転校？だって、ついこの間やってきたばかりで3ヶ月も経ってないのに・・・
転校したんだ。

「あいつ、元々家が転勤族で。親の仕事の関係でよく引越するんだ」

「・・・ちゃんとさよならしたの？」

「あ。うん。それで昨日・・・」

「昨日？」

優也はしまったという顔をして後ろを向いた
あたしは優也をもう一度こっちに向かせて真正面で聞いた

「今日男子共が騒いでたことだね」

「・・・はい」

「一部始終、説明して」

「・・・」

優也は渋々了解し、全てを語り出した。

昨日、放課後ナツコちゃんに呼び出された優也は2年4組の教室に居た

すると、突然ナツコちゃんから抱きつかれたらしい。（ありえない）
そこで「明日転校する」と言われて、告白された。

「え？っていうか、付き合ってたの！？」

「付き合ってたねえよ」

「嘘……」

あたしはどうも間抜けな勘違いをしていたらしい。
今まで散々傷ついた結果がこれ……

それでこれが最後って言われてキスをされそうになったと……

「けど、してないから！！断じてそこはしてないから」

「そう。」

「……今度はお前の番だぞ」

「は？」

「ほら。今日大喜が言いに来たって言っただじゃん。その前に、何があつたか」

「あ……えーっと……」

「いえない事してたんだろ」

NOとキッパリいえなかった。

第一に抱き合ってたし。ほっぺにキスされたし。

まあ。真実は言わなかった。
優也は相当ぶうたれてたけど。

「帰ろうか」

「……うん」

あたしは少しよろめきながら立ち上がり、優也に支えられる。

なんて久しぶりなんだろう。

冬の寒さはあたしたちを凍えさせるけど、何故だか心はとてもあったかった。

隣に優也が戻ってきたから。

「けど、ナツコちゃんも可愛そうだよね」

「……転校のことか？」

「うん。」

「昔からなんだよな。あいつ」

「まあ、可愛いからどこでもやっていけそうだけどね」

少し膨れながら優也に当たる。今までずっと嫉妬してきたんだ。それくらいしたって当然の報いじゃないか。

「そうだったらいんだけど」

「……優也はナツコちゃんのことどう思ってたの？」

「まあ、はつきり言えば妹かな。」

「うわ。最低。あつちは絶対期待してただろうな」

「お前だってそうだろ。大喜のこと」

「ダイキは違うから」

「いや。今日俺に言いに来た時は恋する目だった」

恋する目って、なんだよ。

ダイキがまさかそんな・・・そんな・・・

「あたしも、いいお兄ちゃんだと思ってた。」

「お互い様じゃん」

二人で笑いながら校舎をでた。

昨日までの嫌なことは、全部今日笑うためにあったことなのかもしれないな。

とりあえず、元の関係に戻れてよかった。

次の日から、あたし達の一番近くにいた二人が忽然と姿を消した。
ナツコちゃんは転校してしまったけれど

ダイキが居なくなったことにはビックリした。

屋上にいつてもいない。学校にも来ていない。（つていうか、先生はダイキが来ているかさえも把握してない）
電話番号知らない。メルアド知らない。

音信不通になってしまった。

やっぱり、ダイキが居ないとなんか寂しくて。

『お前は一人じゃない。俺が居る。だから、間違っても自分に嘘はつくな』

って言葉。ずっと大切にしようと思う。

今までありがとう。お兄様。成仏してください。

屋上でそつと手を合わせた。

そうしていると、優也に頭を叩かれた。

「大喜は死んでないっつーの」

「あたしの中で永遠の存在なんだからいいんだ。」

「いいのかよ・・・」

「いいの。」

ハルさんの分も。手を合わせた。

これは本当。成仏してください。ダイキは、あなたを本気で愛します。これまでも、これから・・・

あ。昨日ダイキが私のほっぺにキスをしたことは大目に見てやってください。

風は私たちをザァツと言う音と共に消えた。

きつと、今はハルさんだったんだ。そう思おう。

ダイキは、風のハルさんを待ってたのかもしれないな……

くしゃみがでて、寒いから教室に戻ろうと優也に言った。

もう、この屋上に来ること殆どなくなるなあ……

寂しさが押し寄せてきたけど、私はもう大丈夫。

優也が居るから。

屋上の扉を閉める。

ギイと鈍い音を立てて重い扉が完全にしまった。

ここからあたしが、新しいあたしが始まる。

そう思うと足取りは軽かった。

あたしと優也の最も近くに居た二人。
突然現れ、そして突然消えた。

美しい天使と

優しい夜の帝王は

今、どうしてるのかなあ・・・

第十四話

粉雪

初雪がついこの前降り、そして今日も雪が降った。

積もりに積もって私のふくらはぎの部分はしっかりと雪に埋まるほどだ。

今日は特別に長靴を履いてきていいと許可が下りたけど、そんなの恥ずかしくて、

学校用の靴とは別の靴で学校へ登校してきた。

見事なまでにびしょ濡れ。帰りまでに乾くかなあと切なげに眺めていた。

それにしても、今年の気象は異常だ。

寒冷前線は、今現在日本をすっぽりと覆っていて、割と南側に位置して冬でも滅多に雪が降らない

この地域でも、これでもかという位に降り続けている。

はじめは雪だ雪だと小学生のようにはしゃいでいた私も

今ではすっかり雪景色にも慣れてしまつて、寒さに凍える日々を送っている。

「あー・・・寒い。」

「ナシヨ。鼻、真っ赤だな。真っ赤なおっ鼻の・・・」

優也は帰り道、寒さにすっかり丸まっている私の顔をみて薄笑いを浮かべながら

赤鼻のトナカイを熱唱している。

道行く人たちの視線なんてお構い無しだ。

しかも、その道行く人たちが私の顔を見て少し笑っているからたまったもんじゃない。

「ちよつとやめてよ！恥ずかしいじゃんか」

「うるせえな。いいじゃんか。俺の熱唱を邪魔すんな」

大して上手くもないくせによくそんなに自信満々に言えるこつたね・・・と言おうとしたけど、やっぱりやめた。

なんかかんやあつたけど、今年も、もう残すところあと1ヶ月もない。

しかも、クリスマスまであと10日切った。

あつという間だったなあ。

「そついえば、あんたクリスマスどうすんの？」

「あ？クリスマスか・・・」

今さっき思いつきました・・・というフリをして、優也に聞いた。これって遠まわしに誘ってんのかな？いや。違う。ただ、気になっ

ただけだ。

けど、もし空いてるんだったら・・・どうだろうな。

「空いてると思う。」

少し、心臓が鳴った。

ただ、空いてると思うって言われただけなのに。あたしも重症だよ
優也は続けた。

「ナシヨは？」

「え。」

「クリスマス。予定あるの？」

「別に。」

「・・・遊ぼっか」

遊ぼっか？それって、・・・お誘いですか？

ヤバイ・・・どうしよう。めっちゃ嬉しい。死にそう。（まあ、寒
さのせいもあるけど）

「うん」

そっけなく返事をした。いや。心の中ではすごく弾んでいる。
それを知られたくなかっただけ。

「じゃあ・・・どうする？」

「・・・どうするって・・・」

「計画決めといたほうがいいだろ」

「あ・・・。とりあえず、プレゼント交換はしたいよね。」

「そうだなあ・・・もういつそのこと俺ん家来るか！」

俺ん家来るか！・・・って。そんなノリで言われましても・・・戸惑うヒマもなく、優也はとんとんとん決めていき、あっという間にあたしの家に到着。

「じゃあ。明日また決めてくるわ。」

「うん。またメールするね」

「おう」

そういつて、優也は手を振って帰っていた。

優也の家・・・久しぶりだな。

小学校の時以来か。でも・・・勝手に行っていいのかな？

優也の家族だっていることだし。

どうなるんだろう。

優也のお父さんお母さん、兄弟とかとは仲は良かった。

小学校の時の話なだけど。

あのときのあたしと今のあたしは違う。前みたいに受け入れてくれるかな。

テレビを見ようとリビングに行くと、そこには兄ちゃんと慶大さんがいた。優也のお兄ちゃんだ。

慶太さんは少しビックリした顔をして兄ちゃんを見た。

「あ。奈緒お帰り」

「ただいま」

「奈緒ちゃん!？」

「あ・・・はい」

「いやあ、大きくなったね」

「どうも・・・」

喜んでいいのか？

なんか10年ぶりに親戚のおじさんと再会した気分。（ごめんなさい慶太さん）

慶太さんはすごくカッコいい。身長が高くて笑顔がステキ。変わってない。

慶太さんと同じ年だったら、あたしきつと慶太さんにベタ惚れしてたんだろうな

まあ、優也なだけだね。

自分で考えときながら何か恥ずかしくなって下を向いた。

「でさあ、おふくろとも話してたんだけど、前市家と滝村家合同ク

リスマスパティーしないかって」

「どこで？」

「俺の家で。」

反応してしまった。テーブルにはあたしがたった今お茶をこぼした後が残っている。

優也の家でパーティー？家族で！？

兄ちゃんは怪訝そうにあたしを見て、慶太さんは不思議そうにあたしを見ている。

恥ずかしくて、一人下を向いて、せっせと机を拭いた。
二人の話に耳を傾けながら。

「ほら。昔したことなかったっけ？何年前に。」

「ああ。そういえばしたことあったなあ」

あつたっけ！？

「それで、お袋も親父もなんか二人で盛り上がっちゃってさ。」

「相変わらず若いな。お前のとこの親も」

「どう？」

「俺は別に構わないけど・・・」

兄ちゃんがあたしに話をふってきた。

「奈緒も、別に用事とかないだろ？」

「あ。彼氏と約束とかあったら、別にいいよ？」

「えっと・・・優也・・・と、約束してますけど」

シーン。

まずいこといった？兄ちゃんと慶太さんは、あたしをじっと見ながら一時停止中。

動き出したと思ったら突然兄ちゃんが歓喜の声を上げた。

「ついに・・・ついに奈緒にも彼氏が出来たか・・・」

「奈緒ちゃんと優也ってことは、二人が結婚したら俺たちって親戚ってこと？」

「そうなるのかな？」

何かこの二人結婚とかの話で盛り上がってるけど、結婚も何もあたし達まだ付き合ってもいないっつーの。

どうして皆あたしらが付き合ってるとか勘違いするのかな？

そんなにベタベタしてないと思うんだけどな・・・

「いや！！まだ付き合ってもいないし・・・」

まあ、それなりのごたごたがありました・・・
歡喜の表情は一気に落胆の顔に変わった。

「なんだよ、まだ付き合ってもないのか・・・」

「仕方ないよ。だってウチの優也だし・・・」

「けど・・・本当にクリスマスパーティーするの？」

「どうする？」

「そっちがいいなら。こっちはいつでも準備万端」

「じゃあ、一応親父とお袋にも言っとく。どうせ亮も予定ないだろうし」

夜。親が帰ってきて慶太さんは帰っていった。

そのあとに兄ちゃんが親二人に話をする、もう見事なくらいに喜び、家はクリスマス気分真っ盛りで浮かれあがっている。

一人部屋にもどり優也にメールを送った。

『前市家と滝村家合同クリスマスパーティーするらしいよ』

『聞いた。なんかいつの間にか家族ぐるみになっちゃったな』

『でも、その方がいいんじゃない？あたしも気兼ねなく行けるし』

『せっかくだから、後で二人でどっか行くか？』

『いいの？』

『いい。いい』

『じゃあ、そうしょっか』

『プレゼント、色々選んどくから』

『あたしも。凝った物とかじゃないけど・・・』

『構わねえって』

あつという間に時間は過ぎ、メールも中断し、そろそろ寝ることにした。

なんか、布団に入ってから気が付いたんだけど

あたし、すごい今ワクワクしてる。

クリスマスが待ち遠しい。

こんなにクリスマスを楽しみにしたのって始めてかも知れないなあ。

小さいころから、親や兄から『サンタなんて存在しない』と夢のな
いことを言い聞かされて育ってきたせいかな

元々そういう空想事には冷めた部分があった。

所詮サンタなんていないんですよ。って小学校低学年の頃
同じクラスの子がはしゃいでいたときにずっと思っていた。

（口には出さなかった。後々めんどくさそうだったから）

そんなクリスマスなんかに興味もなかった私が高校2年になってや
っと

普通の女の子らしく興味を持ち始めた。

プレゼントなんだろう。

別に高いものじゃなくてもいい。優也がくれるものだったらもうなんでもいいや。

あたしも、何あげようかな・・・ぬいぐるみ・・・は可愛すぎるし・・・

あ。ストラップ!! ストラップをあげよう。優也どんなのが好きかな・・・

ウキウキ気分で眠りに落ちた。
さあ。クリスマス楽しみだ。

第十五話

真冬

朝。目覚めは最悪。元々低血圧で朝起きるのがただでさえ辛いのにこの季節の寒さと来た・・・起きれるはずないって。

「早く起きろ奈緒!!」

「うう」

兄ちゃんに半ば強引に引きずり出されながらリビングへその前に顔を洗う。

さっぱりしない。むしろ寒すぎて死にそうだ

「うう・・・」

亮もさすがにあたしと血が繋がっているだけあって朝はとてつもなく苦手だ。

二人で肩を寄せ合いながらストーブの前でじっとして動かない。っていうか、動けない。

「ほら!!何やってんだバカ共!!」

また兄ちゃんに引きずられながら食卓へ朝食を食べに行く。

兄ちゃんは朝は強い。夜も強い。っていうか、弱いところを見たことがない。

バカだから風邪も引かない。

・・・いや。どっちかって言うと頭いいんだけど。有名大学の学生だし。

朝ごはんを食べ終わるとさすがに体も動き出す。

着替えて、歯磨きして、身だしなみチェック。軽めにメイクをし、髪もキレイに整える。

ハネにハネたくせつ毛を整えるのは並大抵の努力と根性じゃあ出来ない

毎朝毎朝、私は修行のごとく苦戦を強いられている。

家を出る。

途中まで亮と一緒に。一緒に行っているつもりはないけど、同じ道を同じ時間に通るため

一緒に行っているという事になる。

そして亮と別れた後、一人で登校。

途中、必ず見るランニングをしているおっさんを見てからじゃないと、やる気がでない。

あ。発見。ああ。今日も頑張っつらっしやるよ。

いっつらっしやゝい。

一人、心の中でそう呟き早歩きする。

学校についてまず最初にすることは屋上に行くことだ。

屋上に行つて、ハルさんの供養をする。って言ってもただ手を合わ

せるだけなんだけど。

あの話を聞いた時から、なんか他人とは思えなくて。自分と似てるなあなんて勝手に思って、手を合わせてる。最近来ていないダイキの分も。

それが終わると教室に戻って優也か理沙と会話する。

「昨日はもう大変だったんだよ」

「何が？」

「親父とお袋がさあ、まだクリスマスまであと10日もあるのに急にパーティーの準備しだしてガーガーうるさいし。」

優也は眠たそうに机に伏せながら話を続ける。

「本当にノリノリなんだ。優也のパパとママ」

「ノリノリなんてもんじゃないって。もうハイテンション」

「懐かしいな・・・あたしのこと覚えてるかな？」

「覚えてる覚えてる。久しぶりに会いたいってずっとほざいてるよ」

会いたいって思ってくれてるんだ。嬉しいな。

小さいころから、優也のママとパパはすごく優しくてあたしは大好きだった。

特に優也のママには特にお世話になった。色々教えてもらったりしたし。

「章くんにも会ってないなあ。」

「多分、今ナシヨよりデカイ。」

「嘘!？」

「ナシヨ今158だろ？」

「うん」

「章一は176だもん」

「でけ。」

優也も慶太さんも大きいけどまさか章一君にまで抜かされるとは思ってなかったなあ。

優也は、でも俺の方がデカイしと呟くように言った。確かにそうだ。優也は178ある。

家系かな？優也のパパも大きいし。慶太さんは優也よりちょっと小さいくらいで175あるし。

育ちすぎだろ。優也の場合。

「どうやってたらそんなに背が伸びんの？」

「食って寝る」

「普通の人間だったら太るよ。その生活。」

「俺は普通の人間じゃないってか？」

「そうだよ」

優也に頭を軽く殴られた。女の子に手を挙げるって最悪。

「あと何日だっけ」

「クリスマス？7日後」

「え！もうあと1週間!？」

「うん」

時間が過ぎるのは早い。

毎日が濃すぎてどんどん時間が加速しているようだ。

あと7日で優也と一緒にクリスマススを過ごせる。そのことを考えるだけで

鼓動が早まり、顔が熱くなる。

そのたびに思う。私は優也のことを本気で好きなんだと。

気付いてはいたけど、実際に感じるこことって今までなかったような気がする。

生まれて初めて、恋って楽しいと思えた。

月日は流れに流れ、あつという間にクリスマス。

私は朝起きるのが苦手にも関わらず、早くに起きて用意をした。しかも出るのはPM6時なのに。

ああ。落ち着かない。

カバンの中にはしつかり昨日準備したプレゼントやハンカチ、ティッシュ、財布、ガム、何故か入っていた

絆創膏。ピン止め、カイロの替えに、メイク用具一式。

これでもかというくらいに全てそろえていた。昨日の夜も落ち着かなくて、一心不乱に

用意したんだっけ。

手には、キレイな包装紙に包まれたストラップ。全体が青色で、小さな銀色の猫が付いてて、本体には『Welfare』と

書いてある。意味は幸福とか、福祉とかそういう意味らしい。

これをもっていると、幸福になれるとか。

5時間、散々悩んで選んだのは「幸福のストラップ」外国製。どこの国かはよく分からないんだけど。

銀色の猫が幸せを運んできてくれるらしい。

自分が買っておきながらなんか恥ずかしくて。「幸福」とか・・・しかもちゃっかり自分もお揃いのを持っていたり・・・。ピンクの色違い。

優也に買ったのはオスで、私の持つてるのはメス。二人で持つてると恋のお守りにもなるらしい。

恋する乙女って感じ。

自分で自分をバカにしながら、携帯につけているストラップを持て余して遊んでいる。

この猫にビビったときたんだよな。

そのとき、部屋のドアがガンガンと音を立てた。

慌てて携帯を隠し、いかにもさっきまで寝てました的に怪訝な顔を作りドアを蹴り開けた。

亮は後ろにのけぞっていた。

「姉ちゃん!! 姉ちゃん!! 雪!!!! ホワイトクリスマス!!!」

あんたいくつだよ・・・小学生か? 中3にもなって情けない。男なら雪ぐらいではしゃぐな!!!

だいたい、雪ぐらい最近よく積もるだろうが。

「雪い?」

窓から外を見た。

真っ白な銀世界が広がっている。朝日でキラキラ輝いている地面。いつもとはまるで別世界にいるかのような気分だ。サンタさんが来そう。

初めて本気でそう思った。

全身赤の暖かそうなコスチュームに身を包み、赤い帽子をかぶって口元には白いひげが

蓄えられ、黒いベルトで少し大きめのお腹を締め、優しそうな笑顔を浮かべて、

赤い鼻のトナカイを連れた木製のソリに乗り、白い袋に詰められたプレゼントを肩に担いでいる

そんな姿が頭に浮かんだ。

小さいころはあんなにバカにしていた空想の中のサンタさん。私に夢を運びに来てくれたのかもしれない。

今日はいいいクリスマスになりそうだ。

早く、優也に会いたいな。

お母さんとお父さんは朝から忙しそうに動いていた。

兄ちゃんは案外ゆつくりとマイペースで用意をしていた。

亮は用意もしないで外の雪景色に釘付け。しまいには用意しなさいと怒られる始末・・・

時間は刻々と時を刻み、あっという間に午後6時。

家を出発。優也の家へと向かった。

ピンポン

お母さんが緊張気味にインターフォンを鳴らす。

出てきたのは優也のママだった。

「いらっしや〜い！！待ってたわ」

「久しぶり！！」

お母さんたちは早速盛り上がっていた。
上がって上がってと催促され、中へ。

「うわぁ」

思わず、感嘆の声が私と亮からあがった。

天井はキラキラと輝いていて、ツリーはすごく大きい。飾りが所々にあつて

花瓶や絵もクリスマス仕様だ。優也のママのセンスが分かるな。すごい可愛い・・・

部屋から慶大さんと優也と章一君らしき男の子が出てきた。
本当に大きいな。章一君・・・あたしを見下ろしてるよ。

「よおナシヨ」

「あ・・・お邪魔します」

本当に、ここは日本ですか？

「章一君？」

「え・・・はい」

「大きくなっただねー！！」

あたしは章一君に声をかけた。ビックリしてたけど、なんとなく誰か分かったらしい。

照れてずっと下を向いている。可愛いねえ・・・さすが現役の中2。まあ、ウチの亮は現役の中3なんですけど身長は軽く抜かされてますわ。

「奈緒ちゃん！？」

「はい。」

「いやあ〜可愛くなっただねー！！」

今度は優也のママが私に話しかけて来てくれた。

私のこと忘れてなかったんだ。よかった。

それにしても昔と全然変わってないな。相変わらず美人で可愛い。

夕食（ディナーって言うの？）を食べ終わり、一通り、クリスマスパーティーが一時休止に入った。

優也のパパはウチのお父さんと一緒に話をして、兄ちゃんは慶大さんと一緒に何かしている。

亮は何故か初対面の章一君と気が合うらしく一緒に行動していた。

まあ、1歳違いだし、話は合うのかもな。

私と優也は取り残されて、二人でいることになった。

「あ。プレゼント。」

「ん？」

「はい」

「え！？マジで！？ナシヨ用意してくれたんだ」

「プレゼント交換するって言ったじゃん」

「何たるな？」

優也は嬉しそうに袋を開け始めた。いつもはおおざっぱなのに、今

日はなんだか丁寧に

袋を開けている。

中を取り出して、見ている。

どう思うだろう・・・気に入るかな？

「うわ！！可愛いんですけどコイツ！！」

と、大声で言った。銀色の猫を気に入ったらしくジーっと見つめている。

「で？」

「？」

「あたしのは？」

「あ・・・ああ。」

「何！？用意してないとか！？」

あたしはちゃんと用意したのに！見返りをよこせ見返りを！！

・・・って言っても、本当は、優也にもらう物だったら基本何でもいいんだけど。

ないって言うのもさみしいな・・・

「いや！！違う！！あるよ。」

優也は焦りながら私をなだめるように、そして、自分を落ち着かせるように言った。

「あるのかよ・・・」
「けど・・・」

なんとも言いにくそうな、照れたような顔を見せてうつむき、あたしを上目遣いでちらちらと見てくる。

こいつ、いつも思うんだけど図体はデカイクせに案外中身は小心者なんだよな。

そこがまたギャップってやつで、嫌いじゃなんだけど。

「何？」

「えっと・・・」

「もー。はつきりしろ!!」

自分のこういう所。嫌いで仕方ない。

男兄弟で育ったからか昔から男言葉をよく使うし、性格も男らしい（といわれる）

そのせいで中学1年までは『男女』なんて呼ばれてた。普通の女の子の使うような可愛らしい言葉なんて使えない。

優也は渋々、自分の机をなにやらゴソゴソし始めて緑色の可愛らしい包装紙に包まれているものを

私に押し付けるようにして背中を向けた。

「何これ」

そつとあけてみる。

私の両手のひらにのる少し大きめのスノードームだった。

全体はピンク色。真ん中には赤い服を着たサンタクロースが赤鼻の

トナカイが引いているソリにのっている。

「……………」

「……気に入らなかった？」

背中を向けながらも心配そうにきいてくる。

「……可愛い……嬉しい」

いつもの強気な声は出なかった。嬉しくて嬉しくて。まさか、こんなに可愛いプレゼントをくれるなんて夢にも見なかった。

今年、冬の初めにダイキと出会い、ナツコちゃんが現れ、嫉妬したり、ムカついたりしたけど

こんなに幸せなクリスマスになるなんて思ってもいなかったから、あたしは今、すごく

驚いている。

「ありがとう……」

「いや……こっちも、ありがとう」

優也にお礼を言うと、優也も改まってこちらを向き頭を深々と下げた。

その姿が面白くて、二人で笑った。

そのあと、優也のお母さんと話をした。昔の話とか最近の話とか気が済むまで話したら、慶大さんと兄ちゃんが人生ゲームしよう！と言ってきて（結構二人とも酔ってたんだけど）

お母さん2人とお父さん2人を除いた6人でした。

一番大富豪になったのは章一君で、あたしは一般庶民だった。

優也はカジノや賭けにドツブリつかりこみ借金まみれになって半ば膨れっ面になりながら終わった。

慶大さんは獣医さんになり、兄ちゃんは何故か占い師になった。

盛り上がった後、楽しい時間はあっという間に過ぎるもので12時近く。

そろそろ帰ろうということになって前市家に別れを告げて家へと帰った。

家に着いて、お風呂に入った。

寝る準備をしてベッドに横になると、ふと、さっきもらったスノードームが気になってカバンから出してじっくり見た。

サンタクロースは黒い点の目をして赤鼻のトナカイを見ている。もしかしたら、赤鼻のトナカイの向こうにある何かを見つめているのかもしれない。

このスノードーム1つで深い話が出来ていく。

そっと、大切に扱いながら一回転させてみた。

キラキラとした金色の粒がスノードーム中に広がった。それに白い雪のような丸い粒も

金色と一緒にになってキラキラと輝いてサンタとトナカイに降り注いでいる。

キレイだ。

あたしなんか、こんな物をもらっていいのだろうか。
優也はあたしのためにこのプレゼントを選んでくれた。なんてあたし幸せ者なんだろう。

あたしがあげたものなんてたかがストラップだ。

なんだか、優也に申し訳ないような気持ちでいっぱいになった。

あのストラップの猫が優也に幸せをもたらしてくれますように・・・

・

心の中で正直にそう祈った。

サンタクロースって、実際にいるのかもしれない。

このスノードームの中にいるサンタクロースは本物じゃあないかもしれない。

けど、優也の気持ちはこのスノードームの中のサンタクロースに詰まっ
まっについて

私の中の気持ちも、このサンタクロースに詰っている。

私思うに、サンタクロースって言うのは人々の想いから生まれたものだ。

だから。あたしはこれからサンタクロースを信じようと思う。

どうかサンタさん。私プレゼントはいりません。

だから、優也と、いつまでも一緒にいれますように・・・

キラキラと、スノードームの中にあるサンタクロースが輝いた気がした。

第十六話

月光

始業式の日は気分が乗らない。っていうか、むしろめんどくさい。長い休みの始まりの儀式とか正直いらないと思う。

クラス替えがあるわけでもないのにさあ……

校長先生のありがたく、そして恐ろしく長い話がやっと終わり、激しい気だるさが襲ってきた。

教室に帰ってくると、皆の顔がやっとよく見えた。

あれ？あのこ、この間まで髪黒くなかったっけ？

あのこも。耳元がなんか明るくなったと思ったたらピアスしてるし。皆茶髪にしちゃってんなあ。

黒髪って、あたしを含めて2、3人になってない？

優也も理沙も、二人とも茶髪だ。理沙はどっちかって言うと黒に近い。

優也は何気に前より赤くなってるし。いつ染めたんだ！！正月にバチ当たりな……

「えゝあけましておめでとうございます!」
「おめでと」

先生から新年の挨拶が聞こえた。

皆元気にやってたか?とか、頭髪の乱れが目立つぞとか。
正直、あたしには大して関係のない話ばかりだけど、先生がすごく
懐かしく感じる。

一応全部終わって、帰ることになった。

「ナシヨゝ帰るぞ」

カバンを背中にリュックのようにしょっている優也があたしに話しかけてきた。

あたしは机の中に入れていたふでばこやらノートやらをカバンに急いで詰め込んで優也にかけよった。

「あ!!ちよつと待って」

「ん?」

「屋上行っていい?」

「いいけど」

まだハルさんに新年の挨拶をしてなかったことを思い出して急いで
屋上へと駆け上り

久々に屋上の空気を吸った。

落ち着く。風は冷たい冬の匂いを運んできて、その匂いがダイキを
思い出させた。

ハルさんが飛び降りたという所で一步下がってしゃがんだ。

「あけましておめでとうございます」

「ございませう」

ビックリして後ろを振り返ると優也も手を合わせていた
少し笑って、前へ向き直る

「去年、ダイキは一步踏み出しました。ハルさんはそれを寂しいと思うかもしれませんが
ダイキの一步を大切にして、見守ってあげてください。

きっと、いつかハルさんを思い出しにここに帰ってくるはずなので、
そのときは迎えてあげてください。」

「ちょっと待てよ。」

「何？」

「ダイキが来るなんてわかんねえじゃん」

「分かるよ」

優也は不思議そうに首をかしげた

「ダイキは、たそがれ屋で寂しがり屋だから。絶対また戻ってくる。」

「……寂しがり屋ねえ」

一瞬、ダイキのタバコの匂いが冬の風に混じって鼻を掠めた。きっと、どこかでまた会える。

絶対に。

久ぶりに会いたいな・・・色んな話がしたい。

「さあ。帰ろうか。」

「おう」

二人で寒さに身を縮ませながら並んで歩いた。

「もし霊能力があつたら、ハルさんと話が出来たのかな？」

「さあ。出来たんじゃないの？」

「たまに思ったりしない？寝る前とかに、自分に霊能力あつたらどういう感じなんだろう・・・とか」

「思う思う！！で、いつの間にか寝てるっていう・・・」

「そうそう」

一瞬、二人の間に沈黙が流れた。

世間一般的には、この沈黙が大いに気まずい雰囲気運んできたり、また一方では天使が通つたなんていうけど

あたしたちの間に流れた沈黙は、二人とも同じことを考え込んでいたから起こった訳であつて

だから多分天使も通つてないし、気まずい空気でもない。

優也が口を開いた。

「死人と話できるって、どんな感じなんだろう」

「怖いよね。やっぱり幽霊なわけだし」

「けどさ。自分の知り合いとか、ずっと会いたかった人とかだったら怖いとかそういう感覚はないと思わねえ？」

「そうかな。」

「死んでも会いたいやつとか誰にでも人生に1人は現れるんだよ。」

「……ふん」

「俺はもう巡り会ってる。」

「え」

変な声がつさにでた。優也は笑ってる。

だって、俺はもう巡り会ってるなんて言うから。誰なんだろう。

「優也は、誰に死んでも会いたいの？」

優也は少し笑って何かいたずらっぽく私を見た。

その瞬間、もしかして優也の死んでも会いたい人って、あたし？・

・なんて自意識過剰なことを思ってしまった。

だって、そんな顔するから。こう思ってしまうのも仕方がないと思う。

結局、優也は最後までそれを教えてくれなかった。

本当はあたしじゃないかもしれない。それこそただのあたしの勘違い止まりかもしれないし。

けど、もし、優也が私に会いたいわって思っていてくれたなら

それ以上の幸せなことは思いつかない。

外は雪が降り続けている。

昨日ほど吹雪のような天候じゃない。しんと降りしきり、粉雪のようにキラキラと輝いて地面へと落ちる。

音も立てずにひらひらと舞い散る雪の花びらは人々の無数の願いのように見えた

なんだかんだ言っ、優也と再会してからかれこれ2年が経とうとしてる。

早かったような。長かったような。あと1年で卒業だ

それまでに・・・思いは伝えられるかな

翌日。っていうか今日。

朝から目覚めが悪かった。

早朝から亮とお母さんがケンカしていてしかもお母さんあたしにまで当たってきた。

イライラしてんだかしらないけど何であたしがそのハケ口にならなきゃいけないのか訳が分からない。

まあ最近忙しそうだし、ピリピリするのも仕方ないのかな

「……なんて冷静に考えて行動するほど私は頭が賢いわけではない。」

もちろん反抗してきた。

で、そんなこんながあつて。まともに朝から勉強する気になれず屋上にいるというのが現在の状況。
すぐ感情的になってしまうのは母親譲りだなあなんてゆっくり流れる時間の中で空を見上げながら思う。

かちゃ……

屋上のドアが開いた。

「ナシヨ」

「……理沙……」

理沙がわざと優也の呼び方であたしを呼ぶものだからてつきり優也が来たものかと思った。

理沙はいたずらっぽく笑い、鼻歌を歌いながら隣に寝転んだ

理沙の甘い香りの香水が鼻をつついて
うとうと気分がさらに増した

「亮とケンカしてきたんか？」

「お母さんとケンカしてきた」

「何で？」

「朝から亮とケンカしてて、そのイライラをあたしにぶつけてきてあたしがムカついてさらに亮に当たったらさらに仲がこじれてきたという・・・」

「ふーん。ややこしいな」

理沙がボソツと呟いた。確かにややこしい。人間ってややこしい。

「星に帰ろうかな」

「奈緒さんはどこの星からきたんだい？」

「・・・キラキラ星」

「分かったから。もういいよ帰りなさい。さよなら」

「迎えに来て」

そついつて宇宙船と交信するかのように空に手を伸ばすと、ますます自分の小ささが嫌になった。

心せまいな。あたし。

「前市が悲しむんじゃない？」

「悲しまねえよ。あんな薄情者」

「ああ、拗ねてるんだ」

「拗ねてないし」

「前市が心配して来ないこと」

別に心配してきて欲しいわけじゃない。むしろ、来なくて気が楽だ。でも、私の体はとてつもなく正直者で心臓が『そうだ！！優也が来

なくて寂しいんだ!』とでも言っているかのように
強く鼓動を打つ。

「もうなんとも言って」

「私悪いこと言った?」

「あたしなんでここに居たんだっけ」

「前市が心配して来ないから」

「多分お母さんとケンカしてモヤモヤしてたからだ」

「・・・・・・」

「そうだそうだ」

「奈緒ってさあ」

「?」

「意地っ張りで強情っ張りで、そのくせ誰よりも寂しがりやの泣き虫だよね。」

「意地っ張りは認める」

「全部当てはまってるよ」

「当てはまってるないよ」

理沙は呆れ顔であたしを見るといきなり立ち上がり私を置いてけぼりにし

さつさと屋上を出た。

なんだったんだ・・・今は。

あたしは、意地っ張りの強情っぱりなのか・・・?

寂しがり屋で泣き虫??

分からない。自分が分からない。どうしたい?どうしてほしい?何を求めている?

唯一分かることといったら私は相当のバカってことくらいだ。

ちよつとしてから誰かまた屋上に訪問者が来た。

誰かと思つてみればそこにいたのは優也で、一瞬ほつとした。

ああ、あたし、放つて置かれたわけじゃなかったんだと。

「寒くねえの!？」

「寒くない」

「嘘付け」

優也は私の横に寄つてきてほいつとカイロを投げた。
カイロと優也の安心感が暖かった

「何泣いてんの？」

薄笑いを浮かべながら優也が頭を撫でてきた

「泣いてないし」

「泣いてるじゃん」

優也は制服の袖で私の涙をちよつと強めに拭くと
背中を叩き出した。もちろん私の

「痛い!バカ!!」

「バカ!?!元氣付けてやつてるんだろぅが」

「はあ!?!」

反抗しながらも、ちよつと嬉しくて、反面ちよつと恥ずかしい。

複雑な思いが交差するんだ
優也の肩に頭を乗せてもたれかった。安心する。

ずっと

このままでいたい

このまま時間が止まったら、動けなくてもいい。ただ、このままで
時が止まって欲しい

人をこんなに愛おしく思うなんて

やっぱり恋って恐ろしい。

けど、いいもんだな。恋って。こんなに簡単に幸せを感じられるんだ

そのまま眠りについて（寒いのに）気が付いたらもう外は暗かった。
ずっと優也は寒さに凍えながら隣で待ってたらしく、少し機嫌が悪
かった。

軽く謝って、帰ることにした。

「ナシヨあの寒さの中でよく眠れたな」

「寒いと眠くなるって言うじゃん」

「しかも見事生還してるし」

「そんなので死ぬわけがないじゃないか」

「寒さの中で眠くなると人間死ぬんだぞ！」

ふん

軽く相槌をうつて、空を見上げると雪が降ってきた

「うおあゝ雪だゝ・・・」

「女らしくねえ声あげんな」

「うるせえ」

寒い。とにかく寒い。そりゃあ、雪が降れば当然寒いのは当たり前のことだけど

手の凍え具合は並大抵のものじゃない。
手をさすりさすり、優也の隣をあくる。

「手、寒いのか？」

「うん」

「ナシヨのくせに」

「意味分からん」

「ほら」

優也は自分のブレザーのポケットを広げて私に入れろと催促してきた。

人様のポケットの中に手を突っ込んで歩くなんて

正直、考えられない。っていうか、恥ずかしくて歩くどころじゃない

「・・・入れろって？」

「そうだよ。こっちも寒いんだから早く入れるなら入れろ！」

「・・・恥ずかしいよ」

「ならいい」

「いや・・・ちょっと待って」

自棄になりながら入れると、そこは想像以上に暖かくて、びっくり

した。

優也の手と触れ合う。

寒さなんて忘れて、お互い恥ずかしさに黙り込んでいた。
・・・恥ずかしいけど、暖かい。

この手を出したら、どうなるだろう。
きっとすごくむなしいんだろうな。

優也の手が私の手を包んで、さらに暖かくなった。
むしろ熱くて汗をかいてきたくらい

家の前に着くまで、ずっと黙りっぱなしだった。
恥ずかしがりでお互いあんまりこいうのに慣れてないものだからか
じっと、その空気をまといながら歩いた。

「じゃあ・・・」

手を抜いた。

虚しさが手から全身へと響く。

「おう。また明日」

「明日ね」

「バイバイ」

心なしか、優也の後姿がなんだか切なげに見えた。

怖いものの、また一つ恋に溺れてしまった。

優也に恋をしている。

ただそれだけで満足できる。

あたし、生まれ変わっても、優也のそばにいたい。
心からそう思える。

嗚呼、17歳の冬。

幸せを感じています。

第十七話

疑問

テレビでは、ドラマで男と女がなんだのかんだのやっている。

そのドラマに嚙り付いて見ている亮は激しく女々しいと思う今日の頃。

ドラマや映画に興味はない。特に恋愛物とか。

人様が悩んでいる様子やその後の幸せになる事情なんて知らないし、どうだっていい。

……って思っていた。

ただ。恋をしだしてからはちょっと変わったかもしれない。

小説やマンガにちよつと共感できるようになってきた。

普通の女子高生はこんな感じなのか、とか。

こんなことを思う私を亮は激しく男っぽいと思うのだろうか

携帯についているクリスマスに買った優也とおそろいの猫を触った。キラキラしていて、すごく綺麗。

優也もこれと色違いだけど同じのを持っている。そう思うとなんだか少し嬉しくなってしまう。

優也のことを考えると必ず優也と手を繋いだことを思い出す。

ポケットの中のカイロの温度だとか、優也の手の湿り具合とか。そのときの空気の匂いとか。

連鎖的にどんどん出てくる。

暖かった。

優也と一緒に過ごしていくうちにどんどん好きになっていく。

はまり込んで、もう抜け出せないくらい。

自分がこんな風になるなんて入学したばかりの時は思っても見なかったな。

優也という時間が一番好きだ。

けど、思いは私の一方通行だ。
優也の気持ちなんて聞いたことないし。

そう思うと、急に虚しくなってきた。ああ。どうせ一方通行なんだ。
むしろ優也からするとあたしって迷惑な存在なのかもしれない。

わがままで、外見も可愛くないし、意地っ張りで、泣き虫で自己中で、ネガティブで・・・

こんな風にネガティブになったのって久しぶりかもしれない。
そういえば一番ネガティブだったのはナツコちゃんのいた頃だったな。

いや、今もどこかにいるんだけど・・・

あの頃は自分が嫌いで嫌いで仕方がなかった。

何のとりえもない自分と、可愛くてスタイルもよくてスポーツ万能で、性格もよさそうだし、魔女の宅急便の

すごく上手だったナツコちゃん。比べようがないのに。

ああ。懐かしい。

どんなに秀でた人よりも、誰か1人にでも必要とされる人が一番なんだって気が付いたのは

そういえばつい最近だったっけ？優也といううちに気が付いたんだ。

今までのことを考えると、優也という分だけ私は輝いてるし、自分に自身を持つことができる

成長できるんだ。

そんな人と60何億人という人間のなかで見つけられたことってすごく幸せなことなのかもしれない。

たった一人の運命の人。

もう見つけてしまった。って思うのはまだ早いのだろうか。

私は優也以上の人をこれからの人生見つけれる確立は、もう0%より低いと思う。

この間話した『死んでも会いたい人』は私の中では優也だ。やっと分かった。

優也に会える日々がすごく愛おしいんだ。

優也と、私の関係って、正直何なんだろう。

優也にとっても私にとっても、まだ友達って気持ちが強いかもかもしれない。

好きだけど、付き合うとかそういうのじゃない、何よりも信じあえる友情。

これからどう変わっていくかは分からない。その分からない日々さえも、私にとっては全てが楽しみで仕方がないんだ。

幸せに浸っている時、携帯の着信音が響いた。
優也専用の着メロ。

『今、何してる?』

優也のこと考えてたよ

なんて、そんな恥ずかしいこと打てるはずもなく、いつも通りになっってしまった

『ドラマ見て泣いてる亮を見て笑ってた』

即行でメールが返ってくる。優也の唯一の特技だ。メールの早撃ち。

『亮泣いてたの?!』

『泣いてる』

『女々しいなあ』

『うん。基本女々しいんだよ』

『それに比べ、本来はお前が泣かねばならない立場だろ！』
『誰が決めたんだつつうの・・・』

どうって事のない普通の無意味なメールのやり取りだけど、優也と繋がってると思うと
ふつつと独占欲が満たされていく気がする。

『明日も一緒に帰れる？』

いつもは私から誘うのに珍しい。けど、ちょっと嬉しかったりする

『帰れると思うよ』

『じゃあ、待ってるから』

『何で待ってるの？同じクラスなのに（笑）』

『明日、先生とお話し合いだって言ってたじゃん。』

はっ！！！！すっかり忘れてた！何してたんだろっあたし！
最近よくサボってたから先生に脅されてたんだった・・・

『痛い』

『（笑）』

『嫌だ〜帰りたいたい・・・』

『待つといてやるからさ』

『ありがとう。多分早めに終わると思う』

しばらくメールした後、お互い眠たくなってバイバイした。
そうだった。明日は補習とか言われてたな・・・先生に。
嫌だよ・・・優也と早く帰ってコンビニ寄って肉まん買う予定だったのに・・・

憂鬱 tomorrow...

今日はずっと先生に監視され続け、屋上にいけなかった。

そのうえ、唯一の話し相手の理沙も風邪を引きやがって休み。優也は図書委員の仕事が

忙しいだとか何とか言って図書室に籠りっぱなしだった。

仕方がないから青木と久しぶりに喋ってた。

青木は最近彼女が出来たんだそうで、髪の毛も前まで寝癖バリバリだったのに

最近じゃあワックスなんかつけてカッコよくなってます。

まあ、相変わらずメガネ君なんだけどね。

やっぱり、姿勢が変わったって言うか、何か前とは違う雰囲気になったって感じがする。

って言ったら、青木は『滝村も変わったよ』だって。

恋すると、人間ってこんなにも変わるものなのかと、改めて二人で実感した。

青木とは地味に気が合って、話すときは深く語り合う。

語り合う内容は大抵恋愛の話とか、時には自然環境の事も話し合うこともある。

けど、やっぱり青木には悪いけどあたしが話してて一番落ち着くのは優也かな。

「最近どうなの。まえつちとは」

「どうなの・・・ってねえ」

「どんな感じ？」

「そんな大した関係でもないですし・・・」

「まえつちも奥手だからなあ」

「けど、この間、衝撃的なことがあったんだよ!!」

「何？」

「こう・・・ね、広げて、『入れろ』って言ってきたの!」

私はこの間あったポケットに手を入れて歩いたことを話した。

ブレザーのポケットを広げて、優也の喋り方を真似しながら事細かに説明した。

「うわ・・・キザ」

「でしょ!」

「俺も試してみようかな」

「言っちゃいけないかもしれないけど、青木にはぶっちゃけ似合わないと思う。」

「ひど!」

「青木は、もっとテレてキョドリながら手を繋ぐみたいなのが一番似合いそう」

「どんなイメージ・・・」

青木とじゃれてたら、優也が帰ってきた。

何の話? って聞いてきたから、二人で顔を見合わせてニヤって笑って、それから

黙ったままにしておいた。

時刻は放課後。生徒の数もまばらになり、空も一層暗くなった頃。唯一の話し相手であった青木は彼女と放課後デートらしく、颯爽と帰って行った。

先生と2人になって、教室で話し合った。

それはそれは日頃の行いのことから、もちろんサボりのこと、勉強の話も出てきて

ありとあらゆる話がポンポン出てきた。

こっぴどく先生に叱られる。こんな成績でお前はどしたらサボれるんだ！とか、

大体お前は日頃からの努力というものが足りないんだ！とも言われたし

人間として、ちゃんと生きていけるようになれ！！とまで言われた。あたしそこまで落ちこぼれ？

どこで誰とサボってるんだ！とか。これには答えなかった。

そのせいで屋上を閉められたら困るし、出入り禁止にされても困る。私の唯一の癒しの空間だから。

時間はあつという間にたち、7時になっていた。

完全下校3分前までじっくりみっちり絞られ、心も体もボロボロだ。

真っ暗になった空を見つめて地上を見るとカップルらが笑顔で腕を組みながら前を通り過ぎていく。

嫌になるなあ。もう。

なんであたしばっかりそんなに怒られなくちゃいけないわけ？

他にもサボってる奴なんてたくさんいるじゃん。

頭が悪いのは元からで、もう今更治せないんだ。

こみ上げてくる涙が頬を伝って、ブレザーの袖で強くこするよう
に拭いた。

マフラーをしっかり首に巻いて校門を出る。

後ろに気配を感じた。丁度、校門の真下。

しゃがんでいるのか、座り込んでいるのか影は小さい。

ふつと振り向くと、そこにはウチの生徒らしき男子がうずくまっ

ている。しかも頭には

雪を積もらせている。

生きてんの？

「あの・・・大丈夫ですか？」

男子は顔を上げた。見覚えのあるその顔を見て、あたしは驚愕し
かなかった。

「・・・・・・・・ナシヨ？」

消えそうな声で私の名前を呼ぶ。確認するよう

「・・・・・・・・何で？優也・・・」

自然と自分の声も震えていた。寒さのせい？そうじゃない。
どうしようもない罪悪感に苛まれているんだ。

「遅せえよ」

無理やり笑顔を作って言ってる。その言葉に私を責めるような気は全く感じない。

「優也……」

「あー……寒い……」

しゃがんで、優也と目線を合わせた。

よく見ると、優也の虚ろな目は潤んでいて、真っ赤な鼻に呼吸は白く荒い。

震える唇と体。どうしよう。私がこんな風にさせたんだ。

「……ごめんね」

優也の頭に積もった雪を払った。

自分って、本当になんなんだろう。生きてる価値あるのかな

「……もう帰ったかと思った……」

「帰らないよ。」

力なく、優也は笑った。その笑顔が痛くて、涙を止めようと思って
も止まらなくなった。

「何泣いてんだよ」

私の頭に手を置いて、きつとすぐく冷えて悴んでいる手で私の頭を

撫でた。

「本当、ごめん・・・ごめん」

「何で謝んの・・・泣き虫ナシヨ」

「ごめん・・・」

「もういいよ。仕方ないって」

優しく、慰めてくれた。さっきまではめていた手袋を外して素手で優也の手を握った。

すごくすごく冷たい。本当は、私が慰めなくちゃいけない立場なのに。

私なんかのために、こんなになるまで待っていてくれた。どうしていいのか分からない。

首にしっかりと巻いていたマフラーを優也の首に巻いて抱きしめた。優也は戸惑う様子もなく、長い腕で私を抱き返した。

「マフラー・・・ナシヨの匂いがする」

「変態」

「はあ？」

「メール入れといてくれたらよかったのにさあ・・・」

「俺が待つときたいって思ったから。待ってたんだって」

さっきまで声は出すまいと堪えていたのに、優也の言葉で一瞬に溢れてきた。

わぁんと。子供みたいに泣いた。

首元は冷えるけど、優也の寒さに比べればどうってことない。自分への戒めだ。

「ありがとう・・・優也」

「・・・帰ろうか」

「うん」

「ナシヨがあと30分遅かったら、多分俺凍死してたね」

「大げさだって」

「メツチャ寒いを通り越してごっそ寒いだったもん」

「ごっそって何？」

「今思いついた」

二人でいつもみたいに笑って帰った。

ただ、唯一いつもと違うのは、二人の距離。近づいて、寄り添って、寂しさを紛らわせるように

隣に優也を感じてる。いつの間にかどちらともなく手を繋いでた。

家の前の公園に着いたとき、私はいつもと違う感覚を覚えた。

「・・・じゃあ、今日は本当ごめんね」

「ううん」

「・・・バイバイ・・・」

名残惜しく、後ろを向いて帰ろうとしたとき

「ちょっと待ってナシヨ！！」

一瞬の出来事だった。気が付いたら優也の顔が私の目の前にあって、

口に暖かい感触に触れた。

少しかがんだ姿勢の優也はいつもより何故か足が長く感じた。
何秒経っただろうか。すごく長かった気がする。

そのうちに口に触れる感触は消えて、唇に少しだけ熱が残った。

「……じゃあな。ナシヨ」

「……バイバイ！」

恥ずかしさと嬉しさで駆け出した。

これが俗に言う『ファーストキス』ってやつか。突然すぎて目を閉じるのも忘れてた。

変な顔してなかったかな？不安だー……

不安ながらも、やっぱり嬉しくてたまらない。

これはきつと「世界の中心で愛を叫ぶ」や「冬のソナタ」に並ぶほどの純愛だろう

とかを考えながら家までダッシュした。

幸せだ

次の日から、私らは前とは違う関係になっていた。

恋人とも、友達ともいえない微妙な関係。

普通の友達にしても密着だって多いし、手だって普通に繋ぐ。しかもこの前はキスだってした。

だからと言って恋人といっても何かそうじゃない気がする。きっと優也も同じことを思っているだろう。

この微妙な関係に二人とも上手く乗れていたと思う。このポジションが一番二人にとって楽だったから。

私としては、好きなんだけど、付き合いたってそこまで思わない。付き合うことにそこまで執着してないから。

付き合うつてことになったら今までとは違う関係になる。それが私は怖いんだ。

執着はしていない。付き合いたくない訳じゃない。

なんだろう。この微妙な関係。

疑問に思っんだ。

そのうち、この疑問も解ける日がくるのだろうか。

第十八話

時間

時は流れて、あっという間に私は高校3年生となり、高校生活も残りわずかとなった。

クラス替えをして3-1になり、優也と一緒にクラスになった。青木は隣のクラスになって

最近じゃああんまり話す機会もなくなってきた。理沙も私と同じクラスだ。

今度こそ、何か進歩があるかな。

新学期が新たに始まるたびにいつも思う。あれから、何の変わりのない優也と私の

関係。全く動かないまま、時は足早に去っていく。

焦っているわけではない。だからと言って、関係にキツパリと見切りを付けたいわけでもない。

自分でも、正直よく分からない。

季節は夏。SUMMER。

冬は夏の暑さを恋しく思ったりしたけど、この気温じゃあ冬が懐かしく感じる。

時たま吹く風は生ぬるく、教室のクーラーはボロボロで使い物にならない。

この暑さをどう乗り越えろと？

「暑い……地球温暖化やあ」

「最近進んでるらしいしね」

「なんで理沙はそんなに飄々としてられるんですか？」

「あたし、暑いのはそこまで苦手じゃないんだよね」

「変な子」。絶対に体どっかおかしいって！

「うるさいね」

こんな季節、直射日光の効力が一番厳しい屋上で寝転ぶのはさすがに無理な話で、

私と理沙は日陰に避難していた。

「で、最近どうなの。」

「何が？」

理沙の隣で体育座りをして持参したうちわで扇ぎながら、太陽が雲に隠れるのを待っていた。

あまりに唐突な質問に少し反抗の色を浮かべる。

この質問を何回問いかけられたことだろう。

大体内容は分かっている。だけど素直に答えない。だってもう飽きた。

何回も何回も、状況報告する必要はない。

「分かってるでしょ。前市のこと」

「分かってるでしょ。答えなんて」

「おい。真似すんな」

「おい。真似すんな」

ゲゲゲの鬼太郎の目玉親父のような声を出して茶化してみたが、これはさすがにタブーだったようで
理沙にパーで頭を殴られた。しかも、パーの癖に何気に強力でじんじんする。

「だから、わーすーれーたーのー」

「それは隣のトトロ。」

「ちがわいつ!!」

「いい加減にしようよ」

「はい。すいません」

理沙に頭を深々と下げ、謝ったが相変わらず理沙の目は怖いまま。

「どうなの」

「全く進歩してません」

「あー・・・イライラするね。君らの関係」

イライラされてもなあ。私のせいじゃないのに・・・

「どうしたいの結局。このまま終わるの？」

「それは嫌だけど・・・」

「だけど、何？」

だんだん理沙の声が苛立ってきている。怖い

「・・・もう少し、友達でいたいって言うか」

「は!!!!」

「え!?!」

「何その超鬱陶しい関係!」

「鬱陶しいんですか?」

「鬱陶しいよ!」

鬱陶しい・・・？少し、しんとした間があいた。

「何が？」

「だから、そのだらだらした関係だよ！好きならさっさと付き合え！」

好きならさっさと付き合えってったって・・・。

どうも今日は理沙ご乱心のような。こういつときは大抵何言ってもイライラされるだけなんだよな

「付き合うとか・・・」

「けどあんたら手繋いでキスしたんだろ」

「黙れ！」

理沙の口を勢いよく押さえつけた。

けど、確かに優也とは恋人さながらのことをした。だけど、これは付き合ってるというのか？

理沙は私の手を払って

「そんなにぐだぐだしてたら、前市いなくなるよ」

マジメに言った。いなくなる？神隠しかなんかにあうのか？

私は笑ってしまった。

「いなくなるないよ」

「駒井ナツコの時みたいにな、可愛い子が来ないとは限らないしさあ」

「・・・けど、もうすぐ卒業だし」

「だからだよ！卒業までに告白しなつて」

「それからでも遅くないし」

「本当に、いなくなつても知らないよ」

「だからいなくなんかならないってば！！」

少し、苛ついて声を荒げてしまった。

こんなつもりじゃなかったのに。ついつい、言ってしまった。

理沙は呆れたようにため息をついて

「じゃあ、好きなようにすればいい」

と、言った

やっぱり、理沙は私よりも大人だ。私がなんだかすごく子供で駄々をこねているだけみたいで
恥ずかしくなる。

こんな所でも聞こえてくる蝉の声。虫のことなんて全然詳しくな
かないけど

多分この声は油蝉だと思う。

蝉の鳴き声はただでさえ暑い夏をますます暑く感じさせるから嫌
いだ。

だけど、道端に転がっている蝉の死体を見ると生命の儚さを感じ、
つい手を合わせてしまう。

急に蝉の鳴き声が止んだ。

「じゃあ、あたし行くわ。」

「え？」

「マジメだから。授業受けてくる」

「・・・うん」

「行かないの？」

「めんどくさいから、やめとく」

そういうと理沙は、あつそ。と外人みたいなジェスチャーをしてさっさと出て行った。

足を投げ出す。日陰から飛び出た脛から下はジリジリと焼かれているように感じて

同時に脱力感が芽生えた。

もう卒業か。早いな。今思ったらこの高校生活、結構濃い。

入学早々優也に恋して、2年ではダイキとナツコちゃんの出現で心が揺れて、そして

数々の進歩。一つ一つが目を閉じれば鮮明に蘇ってくる。

色々経験して、私が後に残せるものは一体なんなんだろう。

これから、どうしたら残り少ない高校生活をenjoyできるのだろう。

なんだか混乱してきた。

ポケットからMDを出してイヤホンを耳に入れ、スイッチを入れた。シンデラー・ローパーの「time after time」が流れる。

大抵、私のMDに入ってる曲は昔の洋楽ばかりで、古風だねなんて言われる。

だけど、過去現在関係なくいい曲はいい曲なんだよな。音楽って素晴らしい。

目を瞑って鼻歌交じりに風を感じる。

いつもは生ぬるくて、息苦しくて嫌気が差すけど、こうやって体全部で感じると

不思議と落ち着く。涼しい風なんかじゃない。だけど何かいい。

あくびが出て涙で視界が少し揺ぐ。

親になんだか罪悪感がわいてきた。

高い学費払ってもらって通ってるのに、こんなとこで何してるんだろ。親不孝極まりないな。

だからと言っていまさらガリガリ勉強する気にはならないけどこうやって客観的に考え事をするとか、そういうことも学校でしか出来ないから

これもこれでいいんだ。そう考えよう。

親に対する罪悪感なんて、今までもろくに湧かなかったのに。

これも音楽の力だろうか。

音楽の力で大人になれてる。感動的だな。

「生きてるか」

うとうとしかけていた時に優也の声が聞こえて少し慌てながら耳からイヤホンを取った。

「生きてるよ」

「授業中にサボるなんて悪い子ね」

「あんたもね」

「何聴いてんの？」

しゃがんで私と目線を合わせた。

「シンディーローパー。」

「誰それ」

「知らないの？」

「しらねえ」

「聞いてみなつて。いい曲だよ」

優也の耳にイヤホンを入れて、しばらく様子を見る。

目を瞑って聞いている優也を見ると終始ほんわかした気分になるんだ

「これってバラード？」

「そうなんじゃない」

「いいねえ」

また目を瞑った。

優也はマツゲがながい。ダイキみたいに綺麗な顔じゃないけどそこまで悪くない

たまに道行く小中学生の女の子に振り返られたりする、そんな感じ。お父さんらしいけど私的に優也はお母さん似だと思う。

大きい身長割りには度胸がなくて小心者だけど、優しくて頼りになつて

励ましてくれたり、たまに（本当ごく稀にだけ）怒ってくれたり

する。

本気で思いをぶつけてきてくれる存在。
大好きで大好きで、本当に優也の存在だけで生きていけるような気がする。

『前市いなくなるよ』

理沙のさっき言った言葉がふと刺さった。
いなくなる。

いなくなるわけなんてないと思ってたけど、そうとも限らないんだ。
私も優也も所詮ちっぽけな人間だから。

言えるときに言ったほうがいい

今告白したら、どうなるんだろう。あたしたちの関係。
「恋人」それとも今まで通りに「友達」？

今の関係を壊すのが怖いんだ。
もし、戻れなくなったら。私は私でなくなってしまう。

今言う？言わない？

やっぱり、言ったほうがいいと思う。

そしたら、もし別れが来たとしても未練はないし。そのときはそのときだ。

「優也、あのさ」

口を開いた時、一気にせみの鳴き声が大音量になった。
びっくりして思わず口をつぐんだ。

「うつわ。蝉うるせー・・・で、何？」

「あ・・・いや。やっぱりいい。」

「何だよ」

流されてしまった。

もうタイミングを掴む勇氣も消えうせた。また今度にしよう。
いつだって機会はあるんだから。

空を見上げた。ああ。青いなあ。

夏空ってこんな風な感じなんだ。

「青いね」

「・・・青いねえ」

優也のその時の表情は、少し悲しそうだったように見えた。

第十九話

季節

時は過ぎ行くのが早くて驚くヒマすら私たちに与えてくれなかった。

高3の1年はとてつもなく早い。

この間夏が終わったと思ったら、もうすでに10月に入ってしまった。

文化祭も、体育祭もあつという間に本番を向かえ、あっさりと終わリ進路についてじっくり考えようにも時が早く回りすぎてどうも納得いく時間は取れない。

相当私は今現在ヤバイ地点にいるそうで、大学にいくのは諦めると担任に言われた。

正直、今まで留年せずにここまでこれたこと事態が奇跡らしい。

大学いなくて、どうやって就職しろって言うんだよ

私としては、大学に行けばなんとか就職できと思っていたからこの言葉に絶望を隠しきれなかった。

けど、相変わらず屋上に来るのはやめない。
数はへらしたけど。

「卒業したらどうすんの？」

「んー……。」

「あたし達もう受験生だよ」

「そんなのお前もだろ」

「……そうですね」

相変わらず、古い曲を聴きながら、うつすら曇り空を見上げて早い時間。

「俺は、将来のことを考えるよりも、今を生きてたいんだよ」

少しカッコいいことを言った優也に軽く拍手を送った。

今を生きる。一番大切なのはそれだ。将来や過去を考えるのはもっと後でいい。

って、今がその『後』なのかもしれないけど。

今を生きることが将来生きることにつながる。

深呼吸すると同時に後ろに倒れこむようにして仰向けになった。

「・・・過ごしやすくなったね」

「うん」

「この場所で秋を過ごすのも、もう最後だね」
「うん」

脱力感と同時に、虚無感が湧いてきて動きたくなかった。
もう、どうでもいいやあ

「文化祭も体育祭も終わったし。」

「そうだね」

「目指す目標がなくなったなあ」

「うん」

私たちは路頭に迷っている。目指すものがなくなった今でも時間は待ってくれなくて
さっさと足並みを揃えていつてしまふそんな日々。

「これから、どうなるのかなあ」

気が付くと口に使っていた言葉。
平然と生きていた私にとって、この疑問がいつどんなときにも浮かぶ。

「俺さあ。実は保育士になりたいんだよね。」

思いもよらない優也の急な言葉にハッと気が付いた。

「保育士？」

「うん。昔から子供とか好きだし。」

「へえ……」

優也、そんなことを考えてたんだ。

全然知らなかった。いつも一緒にいたのに、何で気が付かなかったんだろう。

何か、あたしがすごく幼稚に感じる。

何にも考えずにただ生きて、学校に来て、嫌なことから目を逸らしてた。

「子供が好きな事しか取り柄ないからさ」

少しはにかみながら笑って言う優也は私よりもずっと大人で輝いて見えた。

「・・・子供が好きじゃないとやっていけない職業だから、それが一番大事だよ」

なんて、偉そうに言ってみた。

本当は私なんか偉そうにしちゃいけない立場なのに。

「そうかな」

って、優也が何にも疑いなく私の言葉を信じてくれるから、言っ
てよかったのかな。

なんて思ってしまう。

「・・・ナシヨは、何か将来なりたいものとかある？」

「え・・・」

何も言えず黙り込んでしまった。私には将来なりたい仕事なんてない。

大体、生きていく上での目標すら決まってなんかいないんだから。

沈黙に堪りかねたのか優也はぼそつと呟いた。

「好きなことを極めろ・・・」

「好きなこと」

私の好きなこと。

なんなんだろう。それすらもぱつと出てこない。

何のために私は高校に通っていたんだろう。今まで無駄にした時間

たちを悔いた。

落ち込んでいてもしょうがない。思い立ってから早かった。

今日から、私はマジメになる。

マジメになって、勉強をたくさんして、大学行って、今度こそ好きなことを見つけるんだ。

屋上に行きたい衝動を抑えつつ、眠たくなる授業を受けた。

「保育士さんになるためには、やっぱり大学とかいくの？」

「そうだな。俺は短大とか行こうと思ってるけど」

「どこなの？」

「ほら、K 駅前のI短期大学。」

「あのでっかいビルの上だよな」

「そうそう」

シャーペン片手にヒソヒソ会話する。

今は自習時間だから先生もいないし、皆喋ってるけど何となくお互い声が自然と小さくなっていた。

「ナシヨはどうすんの？」

「あたしは、一応大学行こうかな。やりたいこととかまだ全然決まってるじゃないし」

大学で色々勉強してそれから考えようと思って。」

「ふーん。お互いこれから勉強詰めだな」

くすくす笑った。あたしたちサボり組で有名な二人が「これからは勉強詰め」なんて

他の皆も絶対考え付かないだろうし、私たち自身も意外で可笑しかったから。

放課後はヒマだったから二人で図書室に行って勉強した。

先生は驚きながらも私たちがマジメに勉強するのが嬉しかったように分からないところとかを教えてくれたりするようになった。

なんか、幸せってこういうことなんだなあ

全てが上手く回っている。

これからも、優也と一緒に居れるのかな。
ずっと一緒にいたい。

理沙と、この前の土曜日遊んだ時に将来のことを色々聞いた。

「理沙は卒業したらどうするの」

「あたしは大学行く。」

「どこなの？」

「えっと、アメリカの大学。留学するの。」

「え？」

それまで聞いたこともなかった話に驚くしかなかった。

「留学って言っても永住するわけじゃないんだから。春休みとか冬

休みとかになつたら

こつちに帰つてくるし。」

「けど・・・」

「あつちで、英語の勉強したいんだ。卒業したら、翻訳家になりたいな」なんて思つてる。」

「そうなんだ」

私だけ取り残された気がした。

優也も理沙もちゃんと進む道をちゃんと決めていて、前を向いて歩いている。

「奈緒は？」

「あんまり、具体的なこととか決まっていななんだ。だから卒業したら大学行つて

そこで見つけようかなつて。」

「ふーん。奈緒らしいね。」

「何が？」

「ゆつくりだけど、ちゃんと自分の将来の道を決めようとしてる。焦らないで、スローペースな所が奈緒らしい。」

スローペースか・・・。言われてみればマイペースかもしれない。

「しばらく会えないけど、お互い頑張ろうね。」

「そんな。まだ卒業まで結構あるのに」

強がつて言つてみても、やっぱり寂しさは消えなくて溢れそうになる涙を抑えるのに必死だった。

皆、自分の道を歩いてる。今がその分岐点で、やりたいことを探している子もいれば
理沙や優也みたいにしっかり自分の道を決めていて着実に一步一步進んでいる子もいる。

人生まだまだこれからだ。

どんなことがあっても、くじけないで生きていこう。

そう、心に誓った。

どんなことにも

くじけないで

生きていく

第二十話

別れー前編

季節は冬に差し掛かった。

毎日必死に勉強してきた成果が大学の道も開けて、充実している。
卒業式はもう目の前に迫っている。

卒業はやっぱり嫌。

皆とも先生とも離れたくない。やっと最近マジメになってきたのに・
・

今日もまた、一日が終わった。

「はー・・・寒い」

凍えつく手をさすりながら優也と一緒に帰っていた。

「・・・・・・・・」

優也はじつと本を読んでいる

本のタイトルを軽く盗み見すると

『保育士への道』

短大の試験ももうすぐ。まだ受かってもないのに
保育士への道・・・気が早いな。

内容を見ようと背伸びすると、優也は私に気が付き照れたように顔

を赤くした

「盗み見すんなよ!!」

「保育士への道かぁ。気が早いね」

「バカ!うるせえ」

公園の前に来た時、ころころとボールが転がってきた。

ピンク色の可愛い丸いボールだ。最近のアニメのキャラクターなのか犬のような猫のような

可愛い絵がプリントされている。

ボールが道路に転がっていく前に優也が受け止めた

向こうからちっちゃい女の子が走ってくる。

よっぽど急いでたのか、足が絡まったのか途中でコケてしまった。

私と優也は急いで女の子のところに駆け寄った。

「大丈夫？」

私が声をかけて起き上がらせてあげようと思い、手を伸ばすと

優也が軽々と抱き上げた。

女の子は泣きそうな顔をしている。

「よしよし。痛かったなぁ」

慣れたようにあやす優也。その姿はまさに保育士さんで
適職だなあと思った。

私は女の子の足に付いてた土を払ってあげた。

優也は女の子を降ろして、頭を撫でる。

「泣かないなんて偉いな。はいボール」

優也は笑顔でボールを渡した。女の子は少し笑って

「ありがとう」

と言って、向こうにまた駆けていった。

「さすがだね」

「何が？」

「未来の保育士さん。」

「どうも」

優也に精一杯の激励をおくって、また家路へと向かう。

「あ。そういえばさ、もうすぐナシヨの誕生日だったな」

「覚えてたんだ」

「うん。11月27日。えっと・・・明後日だっけ」

「そう!!!」

11月27日。ほとんどの人はこの日が私の誕生日であることを忘れる。

去年はナツコちゃんとかダイキのことで色々あって優也からはおめでとの一言も聞けずにいた。

第一、誕生日を教えたのは小学校低学年の頃で、まず覚えてなんていないだろうと

諦めきっていたものだったから、驚きと嬉しさで頭がいっぱいになった。

「誕生日プレゼント。何がいい？」

「くれるの？」

「いらないうらいけど」

「いる！！」

「何がいい？」

「そうだな・・・」

考えるフリをするけど、心の中では優也と一緒にいたいと思っていた。

けどそんなこと言えるはずもなく。

「何でもいいよ」

と答えてしまう。

「何でもいいか・・・一番困るんだよな。その答え」

優也がくれるものなら、なんでもいい。

「じゃあ、お楽しみで。」

「やったー」

「どうしようか。当日。」

「うん・・・」

「じゃあ、一緒に遊ぶか。その日大丈夫？」

考えていたことが伝わったのか？それともエスパー？大丈夫に決まっている

「あたしは全然いいけど。空いてるの？」

「空いてる。俺はいつでも暇人」

私の家の前の公園。

今日はなんだか、不思議といつもより優也とバイバイしたくなかった。

けど、もちろんそんなこと言えなくて。

「じゃあ・・・バイバイ」

「・・・・・・」

「？」

優也は黙ったまま何もしない。

「優也？」

「あのさ・・・・・・」

「何？」

また優也は黙ってしまった。

「あ・・・いや。なんでもない。」

「なんでも無いのかよ・・・・・・」

ずっと、優也の手が伸びて私の頬に触れた。冷たい。

「え？」

優也は私に寄ってきて、突然キスをした。

何が起こったか状況判断するのに時間がかかったけど、すごい嬉しい。

目を瞑る。

長い時間を感じた。

去年のあの日以来、手すら繋がなかったのに。突然どうしたんだろ
うと

疑問を持っていると、いつの間にか口に触れる感触は消えていた。

目を開けると、照れたような優也の顔があつて
私まで照れてしまった。

「いや・・・なんて言うか・・・ごめん」

「いいんだけど・・・何でまた突然。」

「何となく」

「なんとなくか・・・」

しばらく黙った後、優也から

「じゃあ・・・」

と、別れを切り出した。

「うん。バイバイ」

私も恥ずかしさを隠しながら家へと向かった。

もしもあの時、私がちゃんと告白していたら後悔なんてしなかったのかな。

どんなことにもくじけないで生きていくって決めたけどくじけないなんて絶対無理だよ。

ねえ優也

私のこと、恨んでる？

第二十一話

別れ - 後編

朝。今日は土曜日だからいつもより遅く起きた。

なんだろう。胸の辺りがザワザワする。体調が悪いのかな？昨日お風呂入ってから寝るの遅かったしなあ

ベッドから出て伸びをすると、携帯の着メロがけたたましく鳴る。

あれ？アラームしてないのに

不思議に思っ て携帯を手にとって見るとメールだった
ディスプレイには『優也』の文字

『おはよう。起きてる？』

早速送った

『さっき起きたとこだよ』

『今から誕生日プレゼント買いに行ってくる』

『やったー』

『楽しみにしてる』

『了解!!』

メールが途絶えて朝ごはんを食べに食卓へ向かった。
やっぱりなんか変だ。体調悪いのかな

「あ。おはよう」

「おはよー」

「どうした？」

兄ちゃんは私の浮かない顔色を察したのか心配そうに私を見ておでこに手を当てた

「しんどいのか？」

「分かんない」

「具合悪いとかないの？」

「うつん。そんなんじゃない」

「じゃあ、何？」

「なんか、変な感じがする」

心臓辺りを摩りながら下を向く

「ザワザワしてる」

「ザワザワ？」

「いつもと違う感じ」

兄ちゃんは少し困ったような顔をしてから

「うつん・・・とりあえず安静にしとけ。無理したら余計悪くなるかもしれないからさ」

「分かった」

「俺もよくなるんだよな」

「本当？」

「うつん。で、なった後は必ず身内に不幸がある。この前亮が風邪引く前にも何かそんな感じになったんだよね」

「・・・そうなんだ」

まだ胸がザワザワしてる。

何かあるのかな。ちよっと不吉だ。

不安な思いもしばらくすると消えてすっかり忘れきっていた。

優也もう帰ってきてるかな？

何買ってきてくれたんだろう。なんでもいいんだけどさ。

メールしてみようかな。

携帯を開いてメール作成の画面にしたとき、家の電話が鳴った。

一瞬びつくりして肩が上がった

家族は誰もでようとしなない。

仕方無しに立ち上がりコタツから出た寒さに凍えながら
電話を取った。

「はいもしもし。滝村で・・・」

「あ！！奈緒ちゃん！？」

早口でよく聞こえなかったけど優也のママだってことは何とか分かった

「はい。そうですけど」

「今すぐ、M病院に来てちょうだい!!」

「え?」

「早く・・・優也が・・・」

優也のママの声と混じって、女の人の声が聞こえた「容態が急変」
小さくだったけど焦ってた。

ジャージの上にジャンバーを羽織って、サンダル引っ掛けてすぐに
家から出ようとすると
私のただならぬ様子に気が付いたのか兄ちゃんが玄関で私の腕を掴
んだ。

「奈緒!? さっきの電話誰から?」

「分かんない・・・優也が・・・分かんないよ!!」

「落ち着け。奈緒。兄ちゃんも一緒に行くから。」

混乱してて頭が回らないのに何でか自然と涙が溢れてくる。
兄ちゃんもジャンバーを羽織って靴をはいて出てきた。

玄関から出た後、私と兄ちゃんは走り出した。
途中、タクシーを拾って乗り込む。

「すみません。M病院まで、早くお願いします!!」

兄ちゃんは案外冷静だった。

涙が拭っても拭っても止まらない。

ジャンパーの袖を目に当てたまま、兄ちゃんに身を委ねた。ずっと、背中をさすっていてくれる。

だけど、全然安心しない。心臓が痛い。早く、優也に会いたい。

いつの間にか、M病院について、足の上手く回らない私を兄ちゃんが引っ張って

走って中に入った。

中に入ると、すぐに優也のママが居た。

「奈緒ちゃん、幸一くん・・・事情はあとで説明するから、ついてきて」

優也のママはさっきまで泣いていたのか目がウサギのように真っ赤だった。

私も同じような顔をしてると思う。

連れてこられたのは集中治療室の前らしい暗い場所。

「慶太・・・」

「奈緒ちゃん、幸一・・・」

慶太さんは暗い顔で私たちを迎えた。

章一くんも、優也のパパも同じような顔をしている。

「家に帰ってくる途中、車に・・・」

家に帰ってくる途中・・・？

そういえば、優也はあたしの誕生日プレゼントを今日買いに行った・・・

頭が真っ白になった。

優也のママに座つてと促され章一君の隣に座った。
じつとして、全然動かない章一くん。

きつと、我慢してるんだ。

優也が死ぬわけない。優也は絶対に死なない。
そう信じて祈ることしか出来ない自分にイライラする。

だつて、まだ夢叶えてないんだよ？
短大に行つて保育士さんになるんですよ。

目の前が、真っ暗になる。頭が痛い。ぐるぐる回る思考回路。

何分経つただろう。手術中の赤いランプが消えた。
ドアが開く。

お医者さんが出てきた。

お医者さんに噛み付かんばかりに優也のママとパパがすがり付く。

「優也は・・・どうなんですか!？」

暗い表情をして、下を向いているお医者さん。ドラマでは決まって・

「精一杯の治療はしたのですが……。何時間と、もう持たないでしょう……」

担架の上でよくテレビに出てくる鼻と口に当てる透明のマスクみたいなのをして

目を瞑っている優也がカラカラと看護婦さんに機材と一緒に押されてきた。

呼吸はまだしていてそのマスクが白くくもったりしている。

私たちは黙ったまま、担架の後を付いていった

連れてこられたのは病室で個室だった。優也は苦しそうに息を続けている

優也のママがそっと近づいて顔を撫でた。

「優也。手術、よく頑張ったね」

その言葉に涙がまた溢れる。

もう、皆の心の中では、覚悟が決まっているのかもしれない。

優也と繋がっている機械がピッピッと心臓の音を響かせている。

優也はまだ生きている。だけど、もう優也の生命の灯火も消えかかりつつあるんだ。

優也のママが一通り頬を撫でてやった後、家族皆一人一人優也と最

後の話をしていた。

優也のパパ、慶太さん、章一くん、その後に、兄ちゃんが優也に話しかけて

ついに、私の番が回ってきた。

優也のママは優しく、私に

「無理しないで」

と肩をさすってくれた。

ゆっくり優也に近づいて、顔を覗き込んだ。

目が薄っすら開いている。意識はあるのかな？意識があるなら色んな思い出話できるのになあ。

けどそんな時間、もう優也には残されていない。

呼吸は荒いまま。だけど、私だと分かっているみたいだった。

気のせいかもしれないけど、優也が「ナシヨ」って呟いたように聞こえたから。

涙が溢れた。手をぎゅっと両手で握って話しかけてみる。

「ゆ……優也」

ぴくんと、反応したように握った指先が動いた。

「分かる？あたしだよ。ナシヨだよ」

また少し、指が動いた、けど、さっきより微かで分かりにくかった。涙が止まらなくて、自分でもなんて喋っているのかよく分からない。なんて言って良いのかも全く分からない。

色んな想いが溢れる。どうしようもなくなつて、ただ黙って優也の手をぎゅっと握ることしかできない。頭が痛い。目が熱くて重い。どうしたらいいんだろう。

そんな時間、優也は必死で生きようとしていてその姿を見るとまた喋れなくなってしまう。こんな歯車が嫌で、一言口にしようとするたびに涙が溢れた。

「し……死なないで。生きて。ずっと、あたしの傍にいてよ」

精一杯の言葉だった。今思ったら、ものすごく自己中でわがままな願い。けどそれ以上喋ることなんてできなくて。辛い。

ああ。出来ることなら私の無駄な命を優也に分けたい。

さっきまで順調に鳴り響いていた心拍数が急に激しくけたたましく鳴り出した。

それに驚いて優也の顔を見ると、少しだけ開いていた目が閉じられ呼吸は荒さを増していた。

急いで横から入ってくるお医者さん。押されて、倒れそうになるのを看護婦さんが支えて私を椅子へと移動させてくれた。

生きた心地がしないよ……優也……戻ってきて

皆忙しく動いている。それが私にはスローモーションをかけているように見えた。

何分足っただろう。

ピーっと長い音が聞こえた。

お医者さんの手が止まった。横では看護師さんが諦めずに心臓をマッサージしている。

まだ若い看護師さんだ。真冬だというのに汗をかいてお医者さんが止めているのにまだ心臓マッサージを続けている。無我夢中になって……

お医者さんに強く呼び掛けられとめられるまでずっと優也に呼びかけを続けていた。

残念そうな顔のお医者さん。耳に付けていた聴診器を外しこちらを向いて一言ぼそりと呟いた。

長い沈黙のように感じられた。

力なく下にへたり込んだ優也のママ。それを受け止める優也のパパ。下を向いて、泣いている慶太さん。信じられないという顔をしている章一くん。

兄ちゃんも斜め上に顔を上げて泣いていた。

『オナクナリニナラレマシタ』

何度も何度も私の中でリピートする言葉。

上手く息が出来ない。

地球の終わりが来たんじゃないだろうか

ゆっくりカラカラと担架が霊安室という個室に移された。
皆、シンとして、誰一人喋り出そうとしない。

「・・・顔・・・見ていいですか？」

静まり返った部屋に私の声がこだました。優也のママは、うんと頷いた。

布の端っここから、優也の赤茶けた髪の毛が見える。

気合を入れて、そつと布を剥がした
優也の顔はあまりにも穏やかで、本当に死んでいるのかと疑うほどだった。

ずつと、死人の顔つてもつと凄いものだと思っていたから
力が抜けて下にへたり込んでしまった。

私を立ち上げようと兄ちゃんが手を伸ばしたけど、私はその手を拒否して自分で立ち上がり
もう一度優也の顔を見た。

少し頬のかすり傷があるくらいで目立った傷跡はない。

そういえば、こんな顔でよく授業中に寝てたな。
ふと、昔の思い出が頭を過ぎる。

「ねえ、優也。早く起きてよ。皆、心配してるよ？」
「・・・奈緒」

黙ったままの優也に話しかけた。涙が止まらない。

「保育士さんになるんでしょ？まだ夢叶えてないじゃんか」
「・・・もうやめる奈緒」

「起きろよ・・・優也。起きろって！！本気で怒るよ！」
「奈緒！！」

兄ちゃんに止められて、また下にへたり込んでしまった。
そんなあたしを兄ちゃんは起き上がらせて外へ出る。

「やだ。優也と離れたくない・・・」
「大丈夫。まだ、運ばないから」

慶太さんの言葉が胸に深く突き刺さった。本当に、優也は死んでしまったと改めて気付かされた

兄ちゃんに連れられて、私はベンチに座りこんだ。
涙が後から後から溢れ出てくる。頭がガンガンする。

「奈緒。お前も辛いと思うけど、優也の家族はもっと辛いな

だぞ！

お前がそんなに未練を感じてたら、優也も逝くところいけないだろ」
「だって、優也……」

混乱して、自分が何を言ってるのか分からない。

私も優也と一緒に死んでしまいたい

心から強くそう思った。

また霊安室に戻り、優也の傍に行った。

顔をもう一度覗くと、穏やかに眠っているようだった。

ねえもう一度笑ってよ。くだらないことを言って皆を笑わせて。

こんなじゃ終われないよ。

私これからどうやって生きていけばいい？

誰か夢なら早く叩き起こして。

まだ優也が起きてきそうだった。月曜日の朝になったらまた元気な顔で一緒に学校で

大声で笑うんじゃないかと本気で思う。

初めて気が付いた。自分がこんなに優也の笑顔を愛しく思うなんて。

ごめんね。私、まだ受け入れられてないよ。

このままじゃ本当に狂ってしまいかもしれない。

優也に被さる様に布団の上から体を合わせた。

だんだんと冷たくなっていく優也が悲しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7933a/>

銀の輪

2010年11月23日16時36分発行